土地と人間

文部省著作教科書

私たちの生活（三）

60008

教科書文庫

6

300

34-1949

200030
1652

375.9
M014

資料室

もくじ

（ページ）
一、地図をながめて……一
二、川ぞいの土地……一〇
(一) 大阪平野には、昔から今日のように人がたくさん住んでいたか……一二
(二) なぜ、大阪平野に人々がたくさん住むようになったか……一五
(三) 川ぞいの地方としては、このほかどんな所があるか……一八
三、台地のひろがる地方……二一
(一) 関東の台地は、どんな特色をもっているか……二三
(二) この台地を、人々はどのようにしてかいこんしたか……二六
(三) なぜ、関東平野に人々がたくさん住むようになったか……二四
(四) その他の台地には、どんな所があるか……二五
四、山にかこまれている土地……二〇
(一) 諏訪盆地の人々は、どんなにして生活をきりひらいたか……二三
(二) 京都や奈良は、どのようにして発達したか……二八
五、山の地方……九〇
(一) 木曽谷には、どのようにして人がはこんだか……九二
(二) 火山のすそ野は、どう使われているか……一〇四
(三) 鉱山の話……一一〇
六、海べりの土地と沖あいの島……一二二
(一) 漁業をやっている人々は、どんなくふうをしたか……一二三
(二) 塩は、どんな所につくられているか……一二八
(三) 港は、どんなにして発達するか……一三三
(四) 沖あいの島の人たちは、どんな生活をしているか……一三五
(附) 教師および父兄の方へ……一四二

廣島大學 教育学部 41379

廣島大學圖書之印

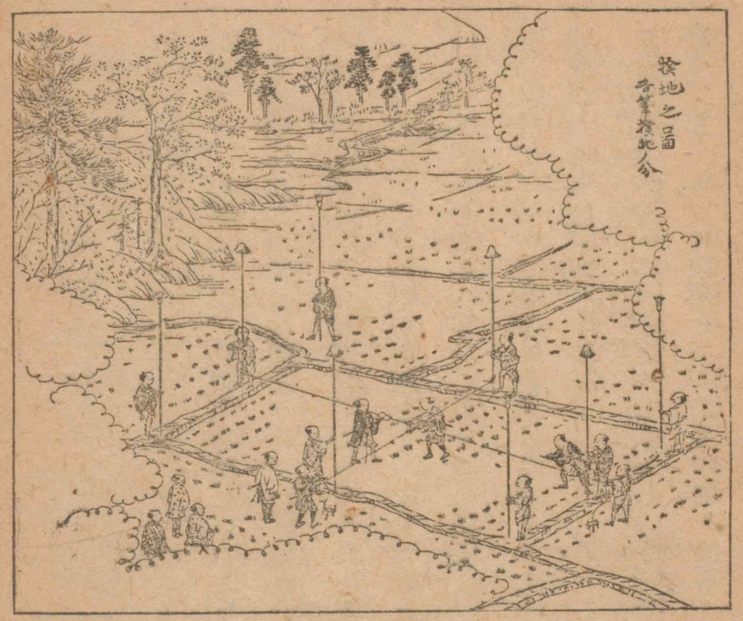
一、地図をながめて

ここに一枚の日本地図があります。よく見ると、その上には、山があり、川があり、平野があり、町があって、鉄道や航路にいたるまで、くわしく示されています。このようにこみいったりっぱな地図を、いったいだれがつくってくれたのでしょう。

地図をつくる苦心　この地図は、大きな都会の工場で印刷されました。しかし、印刷されるまでには、この地図の製版をしてくれた人々や、この紙を手に入れるために苦心してくれた人々がいたのです。この地図の製版は、ずいぶんむずかしいものだと思われます。こんなにこみいった細い線や小さなしるしを、まちがいなく版にほりつけるのは、さぞ骨のおれる仕事でしょう。

この原図をかいたのは、どんな人でしょう。いままでにできた多くの地図を見くらべながら、たんねんに原図をかくのも、決してらくな仕事ではありません。それらの多くの地図もまた、前からあった地図をみくらべて原図をかいたり、版をつくったり、印刷

したりしてできたのだと思います。



江戸時代なかごろの検地（田畑の大きさをはかること）

だが、そのように考えていくと、まだ地図らしいもののなかったころに、いろいろなくふうをして地図をつくってくれた祖先の人たちや、まだ不完全だった地図を正確にするために、人のあまりいかないへんぴな土地にいったり、高い山によじのぼったりして、距離や高さを測量し、しだいしだいに正確な地図をつくってくれた人々、また、そのために必要な正確な測量の機械を発明したり製造した人

人、そういうさまざまの人の苦心が、つぎつぎに思いうかべられてきます。

地図のはたらき　この一枚の地図には、ほんとうに、数えきれないほどたくさんの昔の人や今の人の丹精がこもっているわけです。では、そのように多くの人たちは、なんのためにこのような地図をつくってくれたのでしょうか。その目的は、おそらく種々さまざまであったでしょう。その一つに、私たちの住んでいる土地のようすを、考えたり知ったりするということが、あげられると思います。

そうです。この日本地図をながめていると、さまざまの土地のようすが考えられてきます。平野の中をゆうゆうと流れている川、絶壁につきあたってしぶきをあげている波、四方を山にかこまれた土地、すそ野をながくひきながら煙をふいている火山、そのようなありさまがまざまざと目に見えるようです。土地のようすだけではありません。遠くはなれて住んでいる友だちのこと、炭坑で石炭を掘っている人々のこと、船の羅針盤をじっと見つめながら、かじをあやつっている人、田畑でせっせと働いている村の人人、ありとあらゆる人たちのありさまが、つぎつぎに思いうかんできます。

そう思うと、この地図は、もはや、單に、一枚の印刷物ではなくなつてきます。日本人の活動の舞台である私たちの國土、ひいては日本人全体の生活、祖先の苦心によつてつくりあげられてきた私たちの生活が、そのままそのなかにあらわれているような氣さえします。

戰爭のために、燒けたり、こわれてしまつたりした都市もあります。だが、そこからも、もう復興の色が見えてきました。昔のままの山には木がおいしげり、川には清らかな水が流れています。一時荒れかかつた田も畑も、また生氣をとりもどしてきました。

私たちの住む日本の國は、アジア大陸の東に、大きな弓なりの形をしてつらなつている長い列島です。今、八千万といわれる私たちの兄弟は、ここでいつしょうけんめいに働いています。人口のわりにせまい土地ではあるが、私たちの祖先はさまざまのくふうと、たゆまない努力とによつて、この土地の上にりつぱな生活をうち立ててきたのです。現在もまた、外地から引きあげてきたたくさんの人たちをむかえて、この上にもなお土地をひらき、新しい産業をおこそうとこぞつてはげみあつています。私たちが、平

和な美しい日本をつくりあげるように、しつかりと努力をしていくならば、外國の人々も、力ぞえをおしまないといつてくれています。

私たちの生活のしらべ方　私たちは、もう一度、私たちの今日の生活が、どんなにしてつくり出されてきたか、どんなにいとなまれているかを考えてみたいと思います。それによつてはじめて、これからの私たちの生活のしかたが、はつきりと考えられてくるからです。

どのようにして、私たちの生活をしらべてみたらよいでしょうか。九州の南のはてからはじめて、北海道の北のはしまで、あちらにいきこちらにいき、くわしくしらべてみましょうか。なるほどそれはよい考えです。しかし、それにはずいぶん時間がかかります。自分の住んでいる土地をおもにくわしくしらべ、他の土地の生活をこれとくらべて考えていつたらどうでしょうか。それもよい考えだと思いますが、それだけでは、片手おちになるおそれがあります。農村とか、山村・漁村とか、町とか、都会とかいうように、わけてしらべていつたらどうでしょうか。そうすれば、片手おちにはならないかもしれ

ません。だが、それらの生活をばらばらにしらべたのでは、まだ私たちのほんとうの生活はわかりません　むしろ、昔からの私たちの食物のこと、住んでいた場所のこと、きていた着物のこと、いろいろな職業のこと、そのようなことをくわしくしらべていくうちに、私たちの現在の生活が、どうしてできてきたか、またどのようにいとなまれているかを知ることができるかもしれません。

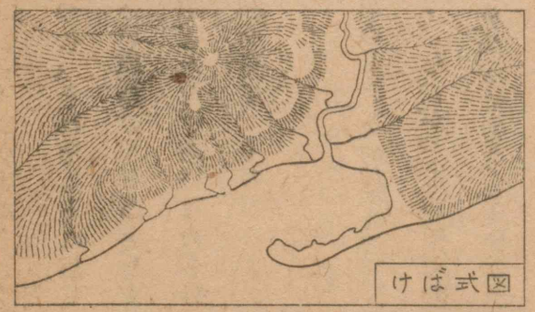
いろいろなしらべ方がありますが、そのめざすものは、結局ひとつです。手分けしてやってみて、これをもちよってみたらどうでしょうか。

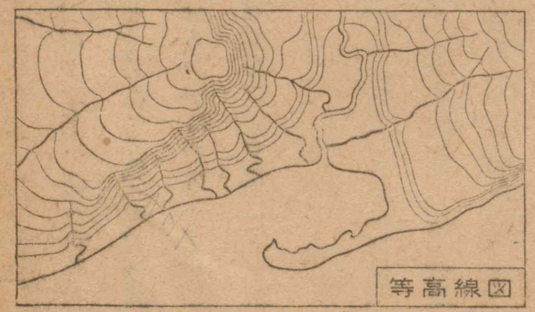
この本では、わが國の中で、とくにめだっている土地を何種類かとりあげて、そこに住む人々の生活を考えていきましょう。あなたの今住んでいる土地のことは書いてなくても、しかし、きっと、それらの中には、あなたの住んでいる土地にも通ずる点があることと思います。また、日本全体の生活をしらべるのにも、役に立つことでしょう。

地図の読み方　この本の中にはたくさんの地図がはいっています。本文を読みながら、これらをしらべていくと、内容がいっそうよく理解できると思います。

地図といっても、いろいろな種類のものがあげられています。たとえば、おもに地形を示すものがあります。それには模型図式のもの、けば式のもの、等高線式のものなどがあります。この三つのそれぞれのちがいと特色については、実例でしらべましょう。

上の図は模型図、または鳥かん図ともいわれます。中の図は、上の図の前面の部分を、けばで書いたものです。けばでは線が太く短い所が急傾斜で、細く長くまばらな所は、傾斜がゆるやかです。下の図は、中の図を等高線で書いたものです。等高線とは、海面か





ら同じ高さの地点をつらねた曲線をいいます。

等高線式の図は、これを別の紙にうつし、それをもとにして、ボール紙を切りぬき、下から順々につみかさねると、おもしろい模型ができあがります。これによって、等高線の密な所とまばらな所とでは、傾斜がどんなぐあいにあらわれるかがはっきりすることでしょう。こうして、中の図や下の図を見て、上の図のような地形がすぐ頭にうかぶようになりたいものです。

地図では方位や縮尺に注意する必要があります。方位は特別に示されていない場合は、ふつう図面の上の方が北になっています。したがって右の方が東、左の方が西、下の方が南になります。縮尺とは、実際の長さを縮めてあらわす場合のものさしをいうのです。ふつう地図では何千分の一とか、何万分の一とかいうふうにかんたんな数字で示します。地図の中に、そのものさしを入れたものがありますが、それで、A点からB点までの実際の距離を図上ではかることができます。

地図の中で、土地の種別や産物の分布を示すものがあります。土地の種別は、色でぬ

り分けたり、記号で示したりします。耕地の面積や産物の量を、点で示したものは、ドット式の分布図で、五一ページの桑畑の分布図はその一例です。円や、正方形の大きさや、球の大きさで比較したものもありますが、それらは、いずれも、あらわす目的によって、ちがった方法がとられているのです。正方形のものとしては、一一八ページの石炭の産額比較図、球のものとしては、四三ページのさつまいもの分布図などがそれです。ドット式と球をあわせ示したものは、一一ページの人口の分布図です。球は人口一万以上の都市の大きさを示してあります。これを見ると、ひと目で、人口の多い所少ない所がわかって便利です。そうして、どんな所に人口が多いか、また少ないかということなどを、考えるのにも役立つと思います。

注一　教室の壁や自分の勉強部屋に、地図をはってながめましょう。

注二　いろいろな模型のつくりかたを研究し、実際にやってみましょう。

注三　地図を拡大する方法をくふうし、教科書の中の適当な地図を拡大し、色づけして、みんなでながめあいましょう。

注四　江戸時代の末ごろ、はじめてわが國全体の形を明らかにした、伊能忠敬のことについてしら

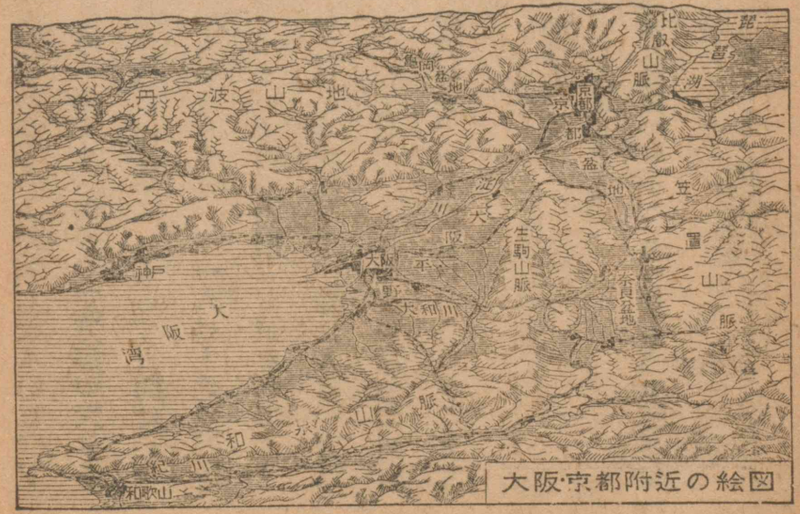
べてみましょう。

注五　いろいろな地図をもちよって、展覧会をするのもおもしろいと思います。

注六　地理調査所発行の一万分の一、二万五千分の一、五万分の一、二十万分の一などの地図について、自分たちの住んでいる地方をしらべてみましょう。

二、川ぞいの土地

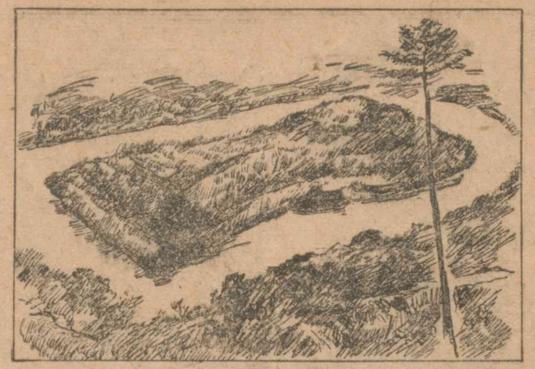
ここは大阪平野です。ここは今日、わが國で人口の最も多い地方です。大阪市をはじめ、多くの都市があり、町や村にもたくさんの人が住んでいます。ことに、淀川や大和川の川ぞいの地方には、町や村が発達しています。



大阪・京都附近の絵図

人口の分布図

いったいこの地方には、ずっと昔から、今のように、人々がたくさん住んでいたでしょうか。どんなわけで、この地方に人々がたくさん住むようになったのでしょう。また、この地方の人々は、どのようにして自分たちの生活をきりひらいてきたのでしょうか。

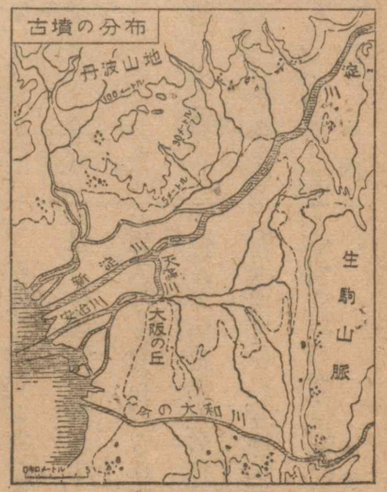


古墳の絵

(一) 大阪平野には、昔から、今日のように人がたくさん住んでいたか。

ひと口に昔といっても、はっきりしません。まず石器時代のことからしらべてみましょう。

大昔、人々がまだ、銅や鉄そのほかの金属を使うことを知らないで、金属のかわりに石をさいくして道具につくり、それを使って生活していた時代がありました。そのような時代のことを石器時代といい、わが國では、今から約二千年ぐらい前までが、そのような時代でありました。



・大阪平野の石器・古墳・郷の分布

大阪平野で、そのころの人が住んでいたと思われるおもな場所は、平野の東に横たわる生駒山脈の西がわのふもとや、平野の北西にある山地の附近で、高さ三十メートルぐらいの所、それから平野のまんなかに、南の方からつき出て

日本歴史の時代わけ

（西暦紀元）

石器時代	～一・二世紀
古墳時代	二・三世紀～六世紀
大化改新	645年
奈良時代	八世紀いっぱい
平安時代	九世紀はじめ～十二世紀末
鎌倉時代	十二世紀末～十四世紀はじめ
室町時代	十四世紀はじめ～十六世紀なかばすぎ
（戰國時代	十五世紀はじめ～十六世紀なかばすぎ）
安土桃山時代	——信長秀吉の時代
	十六世紀なかばすぎ～十七世紀はじめ
江戸時代	十七世紀はじめ～十九世紀なかごろ
明治維新	1867年
明治・大正時代	十九世紀なかごろ～二十世紀はじめ
昭和時代	二十世紀はじめ～

いる丘——今の大阪市の東の方で上町とよばれている台地——や、その東がわのへりのあたりでした。これらの場所から、石器その他のものが発見されるので、そのことがわかります。

そのころ、この丘の内がわには、今の大阪湾が深く入りこんで入江をなし、これらの場所に住んでいた人々が魚や貝をとったりするのにも便利だったようです。一、二世紀ごろから六世紀ごろまで、だいたい五百年ぐ

らいの間にわたって、人々が住んでいた場所は、そのころにつくられた古墳のあり場所からも考えることができます。古墳は、石器の出る場所から、そう遠くないところにつくられています。しかし、石器の出る場所よりは、もっとひろがり、もう少し低い所にまでさがっています。農業をやっていた古墳時代の人々は、これらの古墳からあまり遠くない所に住んでいたのでしょう。

以上でわかるように、この地方も、昔は、今のように人がたくさん住んでいたわけではありません。それでは、いったいどんなわけで、この地方にたくさんの人が住むようになったのでしょう。

注　古墳のことは、「くにのあゆみ」上の三ページに書いてありますが、それは、非常に大きなもので、たくさんの人を使ってつくった身分の高い人のおはかです。

(二)　なぜ、大阪平野に人々がたくさん住むようになったか。

もう一度、石器時代から時代をおってしらべてみましょう。このことをしらべるには、この地方の人々が、どのような生活をし、またどのようにして自分たちの生活をき

りひらいてきたかを、あわせてしらべなければわかりません。また、土地のようすが、自然の力や人々の努力でかわっていったことも、考えあわせる必要があります。

狩猟生活　石器時代の人々は、はじめ、動物を飼ったり植物を育てたりする方法を知りませんでした。しかし火をもしつづけておくためもあって、かんたんな住居に住んでいました。

人々は、野山にしぜんにはえている草木の実や、やわらかい葉や、くきや、根をとってたべたり、おいしそうなけだものや鳥をとらえたり、川や浅い海で魚をとったり、あるいは貝を拾ったりなどして、食物を手に入れていました。野山には草木が茂り、けだものや鳥もたくさん住んでいて、そうしたことが、わりあいかんたんにできたのでしょう。

ところが、たくさんの人が、ある場所にばかり集まって住んでいるとすれば、そのまわりのけだものや草木は、まもなくとりつくされてしまいます。それでは困りますから、人々は一か所にばかり集まって住むよりは、ばらばらに分かれて住むほうがつごうがよいと考え、なるべくあちらこちらにちらばって住むようにしていました。それでも、一

定の場所に長く住んでいれば、あたりのけだものや鳥や、魚などの数が、しだいに少なくなっていくかもしれません。そのときは、新しい場所をさがしてすまいをかえなければなりませんでした。

けれども、このような生活は、決して、安心のできる生活ではありません。なぜなら鳥や魚やけだもの、それから草や木にしても、いつでもすきな時に、すきなものが、自由に手にはいるわけのものではありません。「あの草の実をたべたい。」と思っても、季節はずれの時には、その実はなっていません。鳥や魚やけだものにしても、そうそういつもたやすくつかまえられるとはかぎりません。種類によっては、とれる時期と、とれない時期もあります。そればかりでなく、お天氣のよい日はよいとして、雨の降る日や、雪の日、ことに寒い冬などは、なかなか、たやすくえものを手に入れることはできません。えものが手にはいらなければ、結局おなかをへらしたまま、がまんをしていなければなりません。それでは困るので、できるだけたくさんとっておいて、それを、とれない時のためにたくわえておこうという考えをもちはじめました。

野山からとってきたものを、ただしまっておくだけでは、しなびたり、くさったりしてしまいます。しかし、そのうちに、いつのころからか、人々はうまい方法を考えつきました。それは、おいしそうな野生の草の種を集めてきて、それを自分のすまいのそばにまいて育てたり、鳥やけだものの中で、あつかいやすいものをつかまえてきて、それをすまいのそばに飼っておく方法です。もちろん、そうなっても、しばらくの間は、男はやはり毎日野山をかけまわって狩をし、女の人はおもに家にとどまって、家畜の番をしたり、かんたんな畑の手入れをしていました。

そのうちに、石のほかに、金属の道具をつくる方法も知られてきました。ただ、はじめの間は、金属はなかなか手に入れにくかったので、なおしばらくは、石の道具ばかりを使っていました。

農業生活　その後、金属の産出が多くなってくるにつれて、金属を使った道具もだんだん廣く行われるようになってきましたが、そのころになると、人々はさらにじょうずな植物栽培の方法を考えついたり、新しい耕作の方法を應用してたくさんの收穫をあげ

ることができるようになりました。

こうなると、もう、苦勞して野山をかけまわるよりは、耕作をやったほうがよくなってきたので、いつとはなしに、男の人も女の人の仕事を手つだいはじめ、農業をおもな仕事にするようになってきました。

ところが農業をするには、それにつごうのよい土地と、つごうのわるい土地とがあります。ことに稻をつくるためには、たくさんの水がいりますから、稻をつくる人々は、いっそう水のゆたかな所にうつっていきます。同時に、耕作に力をいれるようになると、今までよりもいっそうたくさんとりいれをしようという氣持になって、かりいれまで、いろいろこまかい手入れをするようになってきます。

こうして、田畑をたいせつに手入れしようとすると、今までのように、むやみに家から遠くはなれた所にでかけたり、すきなところへかんたんにうつり住んだりするわけにはいかなくなります。しかも、農業がしだいに大がかりになり、新しい田や畑をきりひらいたり、さらに、たくさんの農作物をとり入れたりする計画をするようになれば、ど

うしても、おおぜいの者が力をあわせて仕事をする必要があります。

こうして、水の便利な地方には、田や畑の数がふえ、人々はしだいに集まり住み、そして、かしこい人を中心に、おたがいのためになる共同の仕事を進めるようになりました。

とにかく、そういうわけで、淀川や、大和川や、その他の川が流れている大阪平野は、水に便利なので、人々がだんだん集まり住むようになったのです。

水のための工事　さて、水の便利のよいことだけを考えれば、水のゆたかな川のほとりがよいのですが、そこは、大雨にあうと水が岸にあふれて、せっかく苦心した作物をいっぺんにだいなしにしてしまうおそれがあり、すまいも、たちまち水びたしになってしまいます。ですから、そのような危険がなくて、しかも便利な場所を求めた結果、やはりすまいは少し小高い所につくってあったようです。また、田畑も、水の危険の少ない所につくっていたようです。けれども、水の危険の少ない場所では、少し日でりがつづけば、たちまち水がなくなって困る場合が多いのです。この水を、危険のないようにし

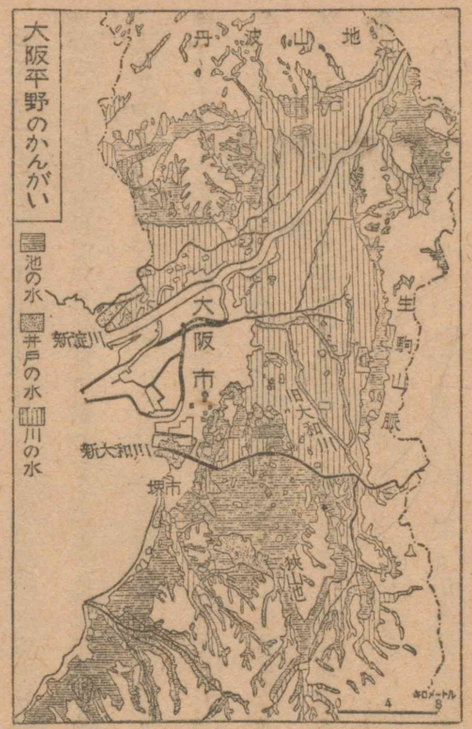
て、自分のすきなだけ十分に利用できれば、稲ももっとたくさんつくることができます。人々はこの点を考えて、いろいろとくふうをめぐらしました。

まず考えたのは、谷川の流れをせきとめて池をつくり、この池の水を使うことでした。こうしておけば、日でりになっても、そう急には困りませんし、大雨が降っても、池の水がふえるだけで、水のあふれ流れる危険は少なくなります。それで人々は力をあわせて土をつみあげ、流れの水をためる池をつくりました。このような池は、谷の間ばかりでなく、後には、平地にも坂を利用してつくられるようになりました。そんな場合、人々にさしずをして仕事をじょうずにやることのできた人は、だれからも尊敬されたにちがいありません。

わが國に朝廷があらわれたころには、天皇が人民に命じて、方々にそのような池をおつくらせになったということです。大阪平野の山に近い所、ことに南の方には、そのようにしてつくられた池が、今でもたくさんのこっています。その池の中でも、平野の南東部にある狭山池は、最も古く、大きいことで有名です。これは、崇神天皇のころにつ

くられたものだといわれています。元來、大阪平野は、わが國でも雨が少ない所です。したがって、つくられた池の多い地方となっています。

池をつくるために土をつみあげ、それがうまくやれるようになりますと、こんどは、ひとつ、大水の危險のある川についても、この方法を利用しようと考えるようになります。つまり、川のわきに土をもりあげて土手をつくり、しっかりした川すじをつくりさえすれば、大水が出ても、この土手で水をささえますから、川のそばに田や畑をつくっても、大水に流される心配がなく、また、そこに家をたてて住みつくこともできるわけです。



あるいはまた、大水が出て水があふれ出るのは、川がせまくて、水をすらすらはこぶことができないからです。ですから、大水のよく出る所に、水のにげ道をもう一本つくってやれば、川の水は二手に分かれるわけで、そうはんらんしないでしょう。こうして、人々は、川のほとりに土手をきずいたり、新しい水のはけみちをつくったりするようになりました。

川の土手をきずいたり、ほりをつくったりする方法は、元來、大陸で発達したもので、なかなかの大工事です。朝廷では、そのような技師を大陸からまねいて、たくさんの人民を動員し、さかんに工事をおこしたのでした。仁德天皇のころには、淀川の分流である天満川のもとになるほりがつくられ、淀川の一部には、茨田堤といわれる土手がきずかれました。

けれども、淀川や大和川の大水はなかなかはげしく、せっかくつくった土手も、しばしばこわされたようです。平安時代のはじめ、桓武天皇のみよには、その土手をなおすため、何万、何十万という人たちが働いたという記録があります。今から千年以上もま

え、八世紀の末のことであります。

このようにして人々が努力した結果、以前よりはずっとたくさんの田や畑をつくることができるようになり、家もかなり低い土地にまでできるようになりました。奈良時代の末には、大阪平野では、いっぱんに、海からの高さ五メートルぐらいまでに人々が住みつくようになり、平安時代のなかごろ（十世紀のはじめ）になると、人々の住める場所は、もっとひろがってきました。一三ページの地図をごらんなさい。これは、そのころの郷（当時の部落）のあった場所を書いたものですが、大阪の丘と生駒山脈との間一帯、それから、淀川の川ぞいにも、部落ができたことを示しています。

以上のようにして、池をつくったり川をおさめたりした人々は、田に水を引くため、その池や川から田まで、また田の間に、たくさんのみぞを掘りました。秋になって稲がみのり、水がいらなくなれば、そのみぞの入口をふさいで水をとめ、自由に水を使いこなすわけです。

時代がくだって江戸時代（十七世紀から十九世紀のなかごろまで）にはいりますと、川の工

事は、もっと大じかけになってきます。たとえば、今日大阪平野の南を流れている大和川は、江戸時代以前には、大阪の丘と生駒山脈の間を流れ、淀川にあわさっていたのでした。淀川の水がしばしばはんらんしたのも、一つにはそのためでした。それを全くなくしてしまうために、土地の人が、頭をしぼって、この川を途中からまげて南に流す大工事をはじめ、長さ七千数百間、はば百間の大運河をつくり、川の道すじを今のようにすっかりかえてしまいました。

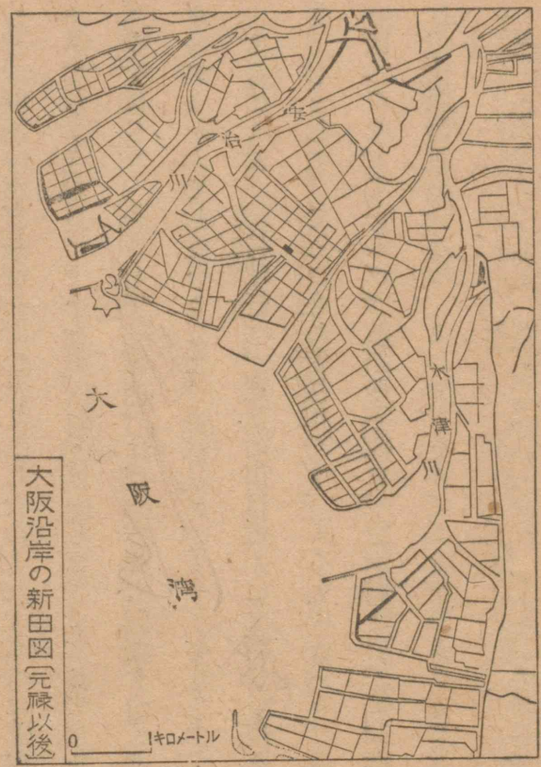
さらにまた、河村瑞軒は、淀川の川口近くにも新しい川をつくって、淀川の水はけをよくしました。これは今の安治川です。

明治になってからは、淀川の下流に、放水路といって、水はけのための川がつくられ、大阪附近の大水は、これでほとんどふせがれるようになりました。

注一　大水をふせぐため、堤防をきずいた所は、わが國の各地に見られます。中でも、木曽川の下流で濃尾平野の西がわ一帯は、まったく堤防でかこまれ、水面より低い場所さえできています。ここでは、長い間、人々は水とたたかってきたのです。

どうして大阪にわけたつしたか

注二　みぞは、つねに掘りさげなければ、埋まってしまいます。それで、各地とも、田に水を引くまえや、とり入れのおわったあとで、川ぼしといってそれを行っています。あなたの住んでゐる土地ではどうですか。また、川の土手や用水池を、人々がどんなにだいじにするか、どんなに共同して守っているか、知っていますか。



大阪沿岸の新田図（元禄以後）

陸地をつくる人々　ところが一方、大きな川の川口には、上流から流れてきた土や砂がつもって陸地になり、川をいくつにも分けてしまうことがあります。淀川の川口にも、こうしてできた陸地があります。それは、だいたい三角の形をしていますから、これを三角州といいます。三角州のできる所は、

海が遠浅になっていますから、ちょっと手を加えれば、もっと陸地の面積を大きくすることができます。もっとも、なかなかその方法を考えつく人はありませんでしたが、いろいろなことを経験して、しだいにかしこく、だいたんになってきた人々は、とうとうまい方法を考えつきました。つまり、海岸ぞいの浅瀬に、大きな土手をきずいて、海水のはいってくるのをとめてしまえば、その内がわに新しい陸地ができるわけです。こうして江戸時代にはいりますと、大阪の三角州の外がわに、どんどん新しい陸地がひらけ、その上に、田や畑ができ、人々がうつり住んで、新しい村をつくるようになりました。こうして大阪平野の海岸線は、だんだん今日のような形になってきたのです。

注一　このように陸地をつくることを干拓といいますが、九州の有明海や岡山縣の兒島湾の干拓も有名です。

注二　あなたの住んでいる土地の近くで、干拓をしてつくった土地がありますか。あったら、その歴史をしらべてごらんなさい。

川ぞいにできる町　川は、昔、交通路として非常に便利でたいせつなものでした。自動

車も汽車も発達していなかった時代に旅行するには、てくてく歩かなければなりませんでした。川の上を船でいけたら、どんなにらくなことでしょう。ことに荷物をはこぶ場合、陸の上だけならば、自分でかついだり、動物にしょわせたり、車につけて引いたり、なかなかの苦心がいります。それを船で川をいけば、つかれも少なく、たくさんの物をはこべます。ですから、人々は、川さえあればこれをさかんに利用しました。ことに、川はばが廣く、流れがゆるやかであれば、川をくだるばかりでなく、逆に、川をさかのぼることもできるわけです。大阪平野を流れる淀川の本流は、大阪湾から琵琶湖まで、長さはわずかに八十キロメートルほどですが、そのうち、京都市内の伏見から下流は、川はばが廣く、流れがゆるやかで、交通路としてはもってこいの川です。それで、昔からさかんに利用されてきました。

このような川のほとりの、船つき場として適当な所には、船に荷物をたのんだり、船にのったり、あるいは船から荷物をおろして引き取ったりするために、あちらこちらから人が集まって來ます。そうして、さらに、その人たちのための休み場所や宿屋、ある

いは、荷物を船につんだり、船からおろした荷物を引き取りにきたりするまで、荷主にかわって荷物をあずかっておく商賣人の店や、人々の必要なものを賣る店ができ、しだいににぎやかな町が発達してきたのです。伏見や大阪などは、おもにそのようにして発達しました。ただ大阪は、ほかの原因でも発達しましたので、これは別にしらべましょう。

注　あなたの住んでいる町には、川のおかげで発達したものがありますか。また日本地図をひらいて、川ぞいにどんな町があるか、しらべてみましょう。

大阪の発達　大阪は、淀川の川口にできた町で、わが國では、東京につぐ大都会です。この大阪が、今のようにさかんな都会になり出したのは、戰國時代の末からのことです。ここは古くは難波の津とよばれ、平安時代のはじめごろまでは、大陸とのゆききに使われる港として発達しました。都も、仁德天皇のころから、何度かここにおかれたことがあったのですが、桓武天皇のとき以來、都が今の京都にうつされてしまい、それにやがて大陸との交通もなくなりましたので、もとのいきおいはだいぶおとろえてきました。けれどもその後も、このあたりには魚をとる人々が集まり住み、市場もでき、し

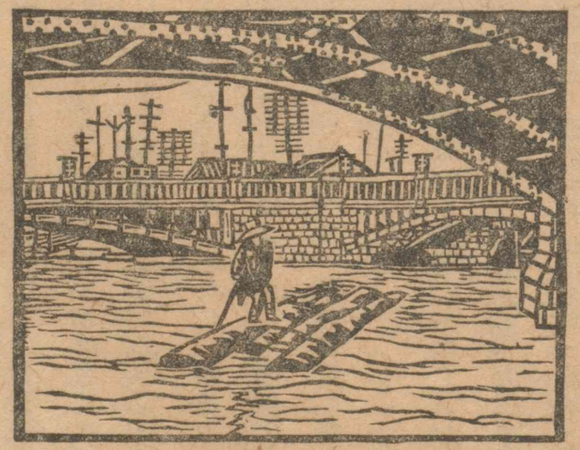
だいににぎやかになってきました。戦國時代にはいると、一向宗の人々が、大阪の丘の北のはしに近く、石山本願寺をたて、あたりにいきおいをふるいました。

この一向宗をおさえた秀吉は、大阪の地が、淀川べりで京都とのいききにつごうがよく、さらに瀬戸内海にのぞんで、海の港としても重要なのに目をつけ、ここをしっかり発達させてねじろの一つにすれば、万事につけて有利だと考え、天正十一年（一五八三）、石山本願寺あとに大阪城をきずきました。さらに、その西がわの低いじめじめした地帯に、水はけのためのほりをたくさん掘って、土地を高くし、町の形をととのえて、ここに伏見や堺に住んでいた大商人をうつり住ませ、今日の大阪のもとをつくりあげたのです。豊臣氏がほろびて、徳川幕府の時代になっても、幕府は、この地が、西國方面の中心として重要であることを考え、大名の手にはまかせないで、じきじきにおさめました。

西國の諸大名は、自分の領地でとれた米や、いろいろの産物を大阪へはこばせました。大阪には諸國からたくさんの大商人が集まり、取引がさかんであった上に、瀬戸内

海を利用して、船で物をどんどん送りつけることができたからです。やがて大名たちは、藏屋敷といって、米その他の産物を商人と取引させるための出張所をつくりました。こうして大阪は、日本における商業の中心地として、おしもおされもしないものになりました。

町の中には、秀吉のときや、その後につくられたほりが、縦横に入りくみ、水面と陸面と、どちらが廣いか、ちょっと迷うほどです。大阪を水の都といい、橋の町とよぶのは、まことによくこの町のありさまをあらわしています。このたくさんのほりは、昔から市内の交通に大きな役目をはたしてきました。今では、人のいききにはあまり利用されなくなりましたが、貨物はやはり、この水路ではこばれるものが多く、荷船がさかんに活動しています。

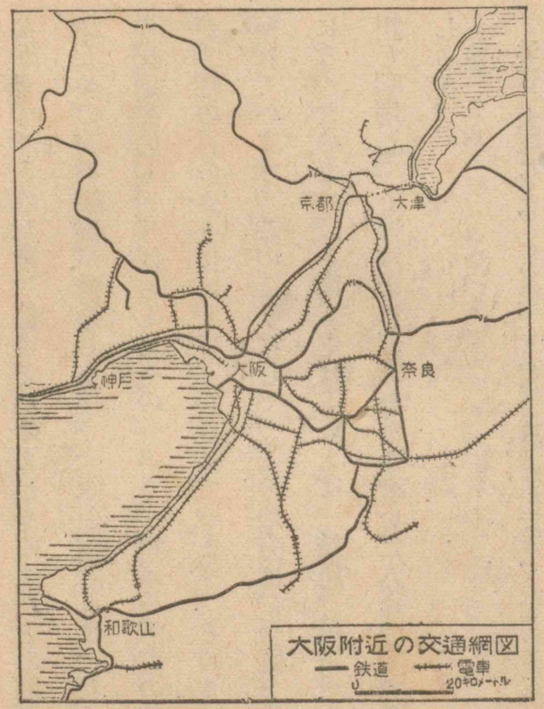


大阪の橋

港としての大阪は、瀬戸内海で指おりのものでしたから、ここから、國内各地の港をはじめ、大陸の諸地方にでかける船も少なくありませんでした。しかし、淀川は、あいかわらず上流から土や砂をはこんできて、港の口を浅くしてしまいましたので、大きな船を入れるためには、たえず大がかりなどろさらいをして、港口を深くしておかなければなりません。それはなかなかたいへんな仕事でした。ですから、明治になっていよいよ大きな汽船が使われるようになると、どうしてもうまくいきません。それに、鉄道もしかれるようになったので、これらの汽船は、浅いはいりにくい大阪よりは、その近くの神戸にはいるものが多くなってきました。こうして、大阪にかわって、神戸が貿易港としてはんじょうするようになりました。

そのかわり、大阪は、商業によってたくわえた資本を、以前から発達しかけていた工業にそそぐことになり、大工業地として発達するようになりました。そのほか、大阪の近くには、たくさんの工業都市が発達しています。すなわち、西の方には、尼崎・西宮・神戸など、南の方には、堺・岸和田などがあります。それで、この附近は、阪神工業地帯

とよばれ、関東地方の東京・横浜を中心とした京浜工業地帯とともに、わが國第一の工業地帯をなしています。



この二大工業地帯は、貿易港をひかえて、海外からの原料品を手に入れやすく、また、製品を海外に出すにもつごうがよかったので、大いに発達したのです。

工業都市・商業都市には、各地から物を取引するために、人が集まってき、そのゆききがひんぱんです。それに町には、たべ物をつくる田や畑がありませんから、どうしても、農村から仕入れてこなければなりません。農村の人にしても、日用品や機械類を買うために

は、町にたよる必要があります。さらにまた、大都市には、人々が多く集まりすぎ、それ以上住む場所がないため、郊外に住んで、そこから工場や会社へかよってくる人も多くなります。そのため、都市とそのまわりの土地との間には、このような人々や物をはこぶための交通機関が発達します。大阪の附近には、たくさんの都市がありますので、その交通発達も、すばらしいものがあり、電車や汽車の線路、および自動車の走る道すじが、網の目のようにはりめぐらされています。そのさかんなことは、わが國第一だといわれています。このようにして、この地方は、全國で最も人のたくさん集まって住む所になったのです。そのもとはといえば、結局、淀川や大和川のおかげであり、またその川を利用し、その水のわざわいをふせいだ人々の努力のたまものということができるでしょう。

注一　大阪にも、その後、りっぱな築港ができ、大きな汽船もはいれるようになり、神戸や横浜とならぶ貿易港として、いっそう便利になってきています。

注二　わが國で、工業のさかんな地方は、このほかどこどこでしょうか。また、あなたの住んでいる土地の工場が、どんな場所にあり、どうしてつくられたかを、しらべて話しあいましょう。

注三　あなたの住んでいる地方と大阪とは、何か取引がありますか。あなたの土地から大阪に出ていってかつやくしている人はありませんか。

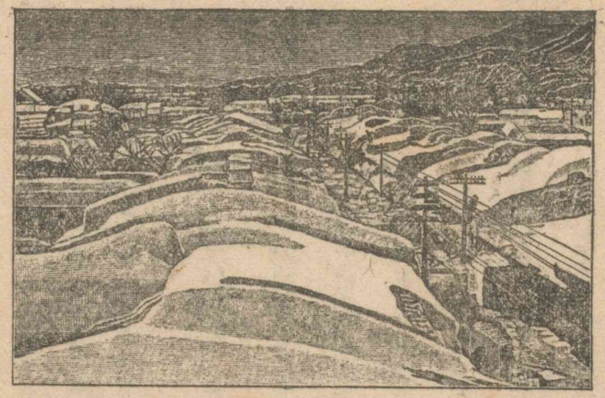
注四　大阪と神戸については、「初等科地理」上を参照しましょう。

(三)　川ぞいの地方としては、このほかどんな所があるか。

わが國の川ぞいの地方としては、大阪平野をはじめ、関東平野・濃尾平野・越後平野・筑紫平野、そのほかに北上川や阿武隈川の川ぞい、北海道の石狩平野などが代表的なもので、おのおの、川ぞいの地方として似たところがありますが、しかも、その発達のようすや土地のありさまには、それぞれのおもむきがあります。そのことは、地図を見たり、ほかの本でしらべたりして研究したらおもしろいでしょう。また、それぞれの土地と、あなたの住んでいる土地の、似ているところと、ちがっているところを考えて、みんなで話しあいをしてごらんなさい。

同じく川ぞいの地方でも、あたたかい地方と寒い地方、それから、太平洋の沿岸と日

本海の沿岸でも、くらしかたにたいそうちがいがあります。太平洋の沿岸は、雪があまり降りませんから、北部をのぞくと、ほとんど一年じゅう戸外で働くこともできます。けれども、日本海沿岸の寒い地方では、雪が早くから降りだし、どんどんつもって、春がきてもなかなかとけません。それで人々は、秋になると大いそぎでかりいれをすまし、冬ごもりのじゅんびをします。



田高の雪

越後平野　長い長い冬がきますと、越後平野の人人は、うす暗い家の中で、かんたんな機械を使って、かますや、むしろ・なわ・ぞうり、そのほかのわらざいくをつくることを仕事にします。そして、早く春がきて、雪がとけるよう、待ちに待っています。人々が待っていた春がやってきて、雪がとけはじめますと、もうがまんがならず、外にとび出します。野山や、田や畑のそばにいって、雪を掘りわけますと、その下に、雪どけを待ちきれないではえ出した若草が、生き生きとした顔を見せます。のびるや、ふきのとうなどは、長い冬の間、新鮮な野菜にめぐまれなかった人々にとって、よいごちそうです。

ところで、冬の間、わらの仕事をしているだけでは、たいくつですし、人手もあまります。それで、雪國の人たちは、昔から、冬になると、となり近所さそいあわせて、よその地方に出かせぎにいきました。だいたい、十月から十二月にかけて出発し、あくる年の三月か四月にかえってくるのです。「たのまれれば、越後から米つきにもくる。」ということばがあるように、ことに越後の人の出かせぎは有名です。

越後平野のほかに、秋田縣・山形縣・富山縣・石川縣などの平野は、いずれも雪の多い地方としての特色をもっています。

注　米をたくさんつくり出す越後では、わらもたくさんとれます。わらは、わらざいくのほかに、つみごえとして肥料にも使われますし、たき物にも役立ちます。さらに、ボール紙の原料としてもたいせつなものです。あなたの住んでいる土地では、わらをどんなふうに使っていますか。

石狩平野　北海道で、石狩川の川すじにひらけている石狩平野は、開拓地として特別な発達のしかたをした所です。

ここには、明治以前はアイヌ人が住んで、魚をとったり、狩をしたりしてくらしていたのですが、明治になってから、本州から移住した人たちが、大がかりに開拓をはじめました。

すなわち、明治維新のころ、武士の職をはなれた人たちが主となり、北海道の新天地にいって生活をたてなおそうと考えて、わたってきたのでしたが、地理もわからず、北のはしの寒くて冬の長いこの地方では、さいしょどうしてもうまくいきませんでした。

そうして、苦労をかさねたあげくみつけたのが、石狩の大平野だったのです。ここは、石狩川がゆたかに流れ、地味もこえていました。農業をするにはもってこいの所です。人々は、元氣を出して土地をたがやしはじめました。そしてその後から、ほかの人たちもしだいにやってくるようになったのです。

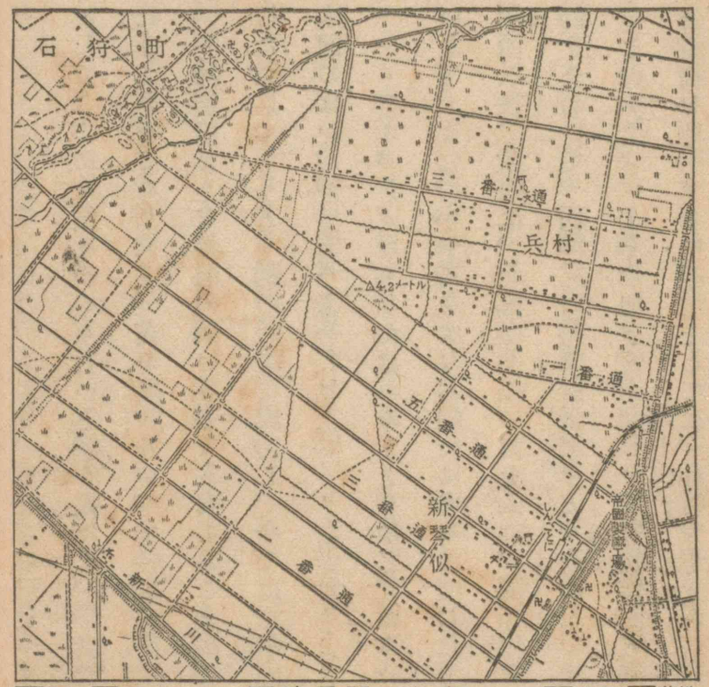
けれども、何しろ寒い土地で、稲にはどうしてもむきません。しかたがないので、はじめのころは、麦や、じゃがいもや、豆などの畑をつくっていました。けれども、なんとかしてここにも稲をつくりたいと願う人々に、学者たちが力をあわせて、種のまきかたにくふうをこらしたり、苗を温床といって特別の苗床で育てることを考えたり、さらに、北海道のような氣温の低い地方でも育てることができる稲の品種がつくり出されたりした結果、とうとう稲の栽培に成功し、今では、水田も廣くひらけています。

水田のほか、畑には麦・豆・じゃがいも・玉ねぎ・てんさい・あま・じょちゅうぎく・ホップ・アスパラガス・りんご・おうとうなど、いろいろな農産物がたくさんつくられています。また、牛や馬をはなし飼いにするに適した、よい牧草地もひろがっています。

明治以後、政府は、北海道開拓に力を入れ、開拓使をおき、学校をたて、先進國から技師をまねいて、西洋式の農業経営法をとり入れたので、農作物にも西洋種のものが多く、またトラクターその他を使う大じかけな耕作法も実行されています。

農産物を取引する中心地としては、札幌や岩見沢が発達し、そこには、農産物を加工する工場もたてられています。

札幌の町をはじめ、この附近の農村は、みんな、ごばんの目のように規則正しくつくられた道路にそってできています。これは、新しい開拓地でよく見受けられるものです。



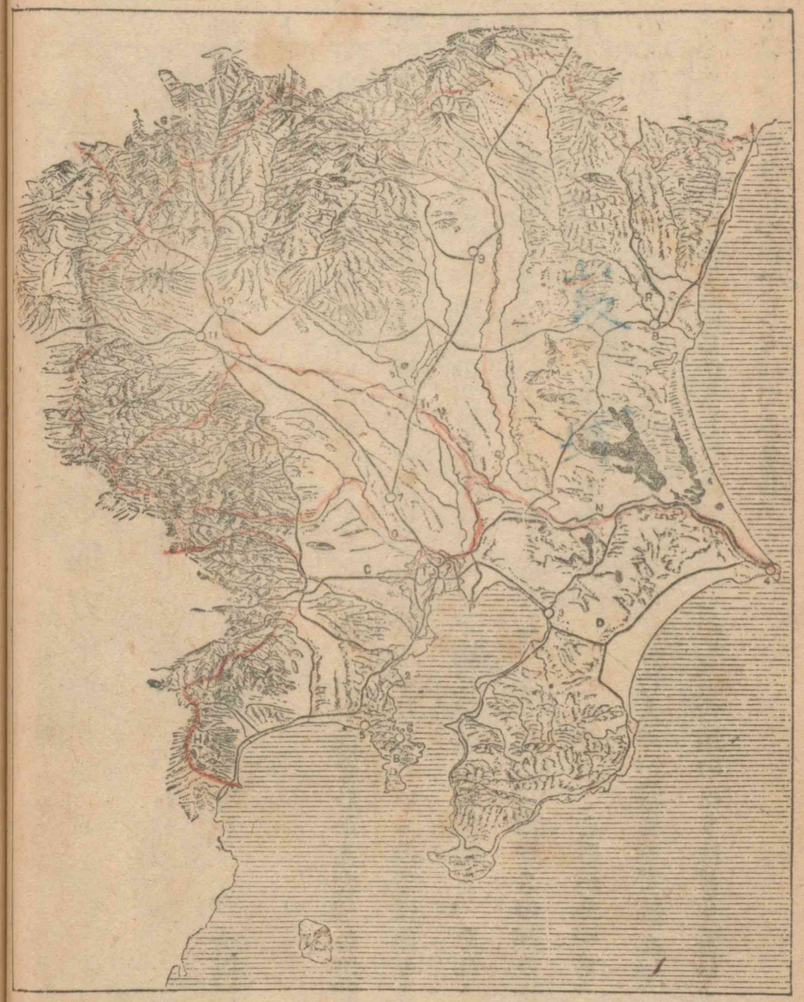
注一　あなたの住んでいる土地で栽培されている稲の品種をしらべ、氣候や、地味との関係をみつけてごらんなさい。

注二　石狩平野のほか、北海道で米のたくさんできる所は、旭川を中心とする地方です。

三、台地のひろがる地方

つぎに、関東平野のことをしらべてみましょう。ここも、わが國で最も人の多く住む地方です。どうして人がたくさん集まり住むようになったのでしょう。大阪平野の場合と同じでしょうか。

関東平野は、北と西に高い山地をめぐらし、南と東に海をひかえた、わが國第一の大平野です。けれどもこの平野は、一面に平らな低地をなしているのではありません。模型図をごらんなさい。現在の関東平野は、川の下流に発達した低地と、それよりも高い丘つづきの台地からなっていることがわかるでしょう。丘は、海からの高さ十メートル以上、所によっては三十メートルから五十メートルにも及ぶところがあって、大きな波のうねりにも似た台地になっています。低地の部分に人々が集まって住んでいるわけは、大阪平野の場合と同じかもしれません。しかし、台地のほうはどうでしょうか。ひとつこの台地についてしらべてみましょう。



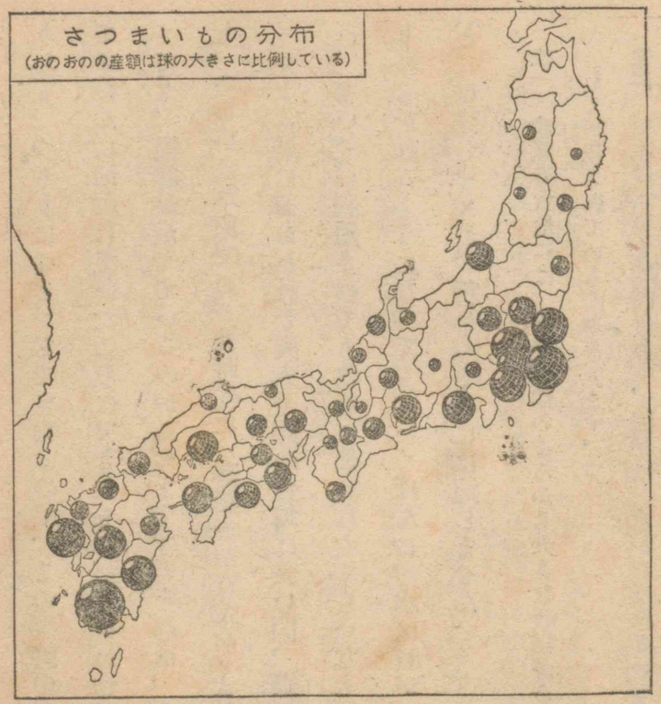
関東平野の模型図　1東京，2横浜，3千葉，4銚子，5鎌倉，6横須賀，7大宮，8水戸，9宇都宮，10前橋，11高崎，
A房総半島，B三浦半島，C武蔵野台地，D下総台地，E関東山地，F阿武隈山脈，G三國山脈，H箱根山，I榛名山，J赤城山，K日光火山群，L那須山，M筑波山，N利根川，O荒川，P江戸川

注一　大阪平野でも、台地は見られましたが、それは、関東平野の台地にくらべたら、小さなものです。

注二　東京の西の方につづいているものは、武蔵野台地とよばれ、また、荒川の低地と、九十九里浜ぞいの平野にはさまれたものは、下総台地とよばれます。

(一)　関東の台地は、どんな特色をもっているか。

稲がつくれない台地　さて、この台地の表面には、ローム層とよばれる赤土が、厚いところでは数メートルおおいかぶさっています。



関東平野のローム層というのは、火山灰が風ではこばれたり、一部は水ではこばれたりして、つもりにつもってできたもので、この平野の北や西にある山々が、大火山としてさかんに活動していたころにできたものだといわれています。ローム層は、赤土といっても、黒味がかっているのがふつうです。それは、もと、台地の上に原始林が茂ったり、あるいは草原であった時代に、落葉やかれ草がくさって赤土とまじったからです。

ローム層におおわれた関東平野の台地は長い間、森林地帯か草原としてほおっておかれ、せいぜい利用されても牧場に使われたくらいなものでした。その後、耕地としてきりひらかれるようになっても、いっぱんに、水はけがよく、麦や、さつまいもや、桑などには適しますが、稲をつくるには適しません。

注一　武蔵野台地には、平安時代のころから大きな牧場がありました。下総台地では、今も牧場として利用されている所があります。

注二　稲には水稲と陸稲があり、陸稲は、水がそれほどいりませんから、台地でもつくることができます。

飲料水のえにくい台地　ローム層の台地は、水はけがよすぎるので、日でりがつづけばすぐ水に不自由します。ことに、飲料水を手に入れるためには、どうしても井戸を掘らなければなりません。ローム層の下には、所によると薄い粘土の層がはさまれています。こんな場合は、ローム層の厚さだけ掘れば水が出るのです。

ローム層の下に、じゃり層のある場合もあります。けれども、せいぜい数メートル掘ったくらいの浅い井戸では、少し天氣がつづくとすぐ水がかれてしまいますから、年じゅう水に不自由をしないためには、もっと深く掘りさげなければなりません。

そこでずんずん掘りさげていくと、砂やじゃりの層があったり、薄い軽石の層があったりします。さらに掘りさげると、厚めの粘土の層を掘りあてることもあります。そこまでいけば、よい水がわりあい豊富にえられるのです。しかし、そのような所につきあたるには、少なくとも十数メートル、多ければ数十メートルも掘りさげなければならないので、そうかんたんに井戸を掘ることはできません。それで、ずいぶん後の時代まで、廣い台地の上には人が住みつかないで、かいこんがおくれたのです。

注一　あなたの家には井戸がありますか。その深さはどれくらいありますか。水はたくさん出ますか。どんな水質ですか。だれが、いつごろ掘ったものですか。

(二)　この台地を、人々はどのようにしてかいこんしたか。

台地のかいこん　はじめのころの人々のすまいは、結局、水のえにくい台地の上ではなく、台地をきざんでいる谷のふちや、谷のはじまる所、あるいは、台地のはしで、平野にのぞむ坂になっている部分でした。そこには天然に水が流れていたり、地下水がわき出ているのがふつうです。このような地形の所には、今でも農家がたくさん見られます。

石器時代がすぎて農業の時代にはいると、人々は、水を求めて川ぞいの低地におりていきました。けれども、あらゆる人が、川ぞいの低地にばかり出かけるわけにはいきません。水がえにくく、田のつくりにくい台地には、なかなか人が住みつかなかったようですが、しかし何かのつごうで、台地にきたものもあります。このような人にとっては、なんとかして、台地を利用する必要があったわけです。そのようなことは、時代がたち、人口がふえるにつれて、ますますふえてきたことでしょう。

はじめのころは、主食としての稲をうえるために、水を引こうとして、努力した人があったかもしれません。しかし、沼や池や川のごく近くのせまい土地以外は、土の性質が性質ですから、どうしてもいけません。それで、ずいぶん長い間、せいぜい牧場として使われるか、人の住んでいる土地のごく近くだけが、水のあまりいらない農作物、たとえば、麦・ひえ・あわ・そばなどをつくるために利用されるていどでした。人々は、そのようなものを、米のたしまえ、あるいは米のかわりにたべていたのです。中でも麦は、つぶが大きく、よういにたくさんとれます。けれども、つぶのままたべるのでは、なんといっても、米よりは味がおちます。それで、米をたべるのになれきっていたわが國の人々は、このような特別の土地をのぞいては、いっぱんに麦をたべなかったようです。このような土地の人々でも、米があれば、米をたべたいと思っていたにちがいがありません。こんなわけですから、麦を、必要以上にたくさんつくるなどということは考えなかったようです。

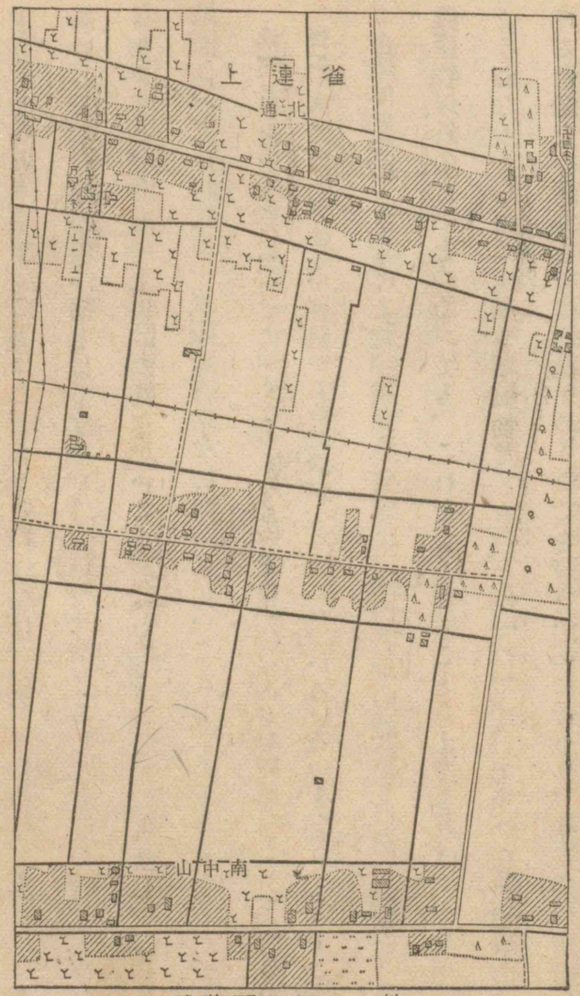
しかし、麦は、米の不作だった年には、なくてはならない食料です。それで、奈良時

代ごろから、朝廷では、さかんに、麦をつくるようにすすめてきています。ことに、時代がくだって武士の世の中となり、大名があらわれて、たがいに領地をもち、ほかの大名と強さを争いあうようになると、大名は、それぞれ、自分の領内の主食を、一つぶでも多くつくり、領内を富まし、自分の力を強くしようと考え、稲のほかに、麦をつくることをすすめました。関東平野を領分にもつ領主は、きっと台地にも目をつけたことと思われます。

江戸時代になりますと、大名たちの領地は、はっきりときまって、これ以上ふやすことはできなくなりました。その上、大名たちは、みな将軍のおひざもとの江戸に屋敷をかまえて、住むようになりましたから、その生活は、年々はでになるばかりです。大名のくらしむきも、だんだん苦しくなりました。

ぜいたくな生活をして、費用がふえれば、なんとかして、その費用をうめるために、収入をふやさなければなりません。収入をふやす道は、その領地から米その他の農作物をふやすことだけです。ですから幕府をはじめ、大名たちは、さかんに農業をすすめ、

かいこんを奨励しました。



武蔵野の開こん地

関東平野の台地でも、その領主たちは、もう、麦でもなんでもよいから、一つぶでも多く農作物を得ようとして、いよいよ台地のかいこんをさかんにすすめました。

このころ、大陸を通してさかんに外國のめずらしい植物が輸入されました。そのうち、じゃがいも・さつまいも・かぼちゃなどは、麦と同様に、水のわりあい少ない土地でもよくみのります。ことにこのような農作物は、稲が不作の年でもよくできることが多いので、台地の農作物としてはもってこいです。こうして、江戸時代もなかばごろになりますと、台地の上に計画的なかいこんが行われるようになりました。前のページの地図は、江戸時代に、武藏野台地を計画的にかいこんしたありさまを示したものです。

注一　以上のことについては「くにのあゆみ」下の一〇ページを参照してごらんなさい。

注二　外國種の植物や、外國からわが國にとりいれた、いろいろのものをしらべてごらんなさい。

台地に育つ桑　さらにまた、商業の発達は、國内各地の産物を自由に動かすようになり、農産物以外のものをつくっても、これをよく賣ることさえできれば、十分生活ができるようになりました。生糸や絹織物なども、その一つです。ですから地味が桑の栽培に適ずる台地上の諸地方では、桑をつくることがさかんに行われ、養蚕業が発達しました。

註一　生糸や絹織物は、鎖國以前には、大陸からたくさん輸入していたのですが、鎖國以後、輸入

が少なくなりますと、人々は、國内でさかんにかいこを育てて、絹をとるようになったのです。そして、これが非常に発達したため、開國以後は、逆に、輸出をするようになりました。鎖國については「くにのあゆみ」下の六ページ以下をごらんなさい。

注二　前橋・高崎・富岡・熊谷などは製糸業の中心地です。絹織物業の中心地は、桐生・足利・伊勢崎・八王子などです。これらの土地では、人絹や、まぜ織物もつくり出されています。下の桑畑の分布との関係を考えてごらんなさい。

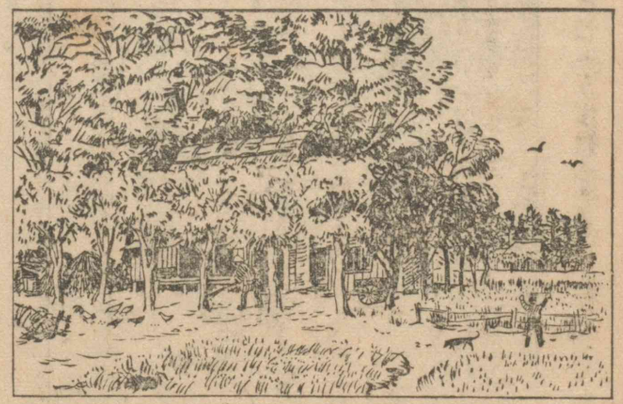
農家のようす　関東平野の台地上に人が住みつき、耕地ができるようになった理由の一つには、井戸掘りの技術が進歩したこともあげなければなりません。深い井戸をじょうずにつくるようになったのは、だいたい江戸時代にはいってからのことです。つまり、井戸を掘るのにも、せまい

桑畑の分布（昭和四年）

穴を掘るだけで、あたりを石でしっかりかためながら、だんだん深く掘っていく方法が行われるようになったのです。江戸時代になると、そのような井戸掘りの商賣もあらわれたといいます。

それにしても、機械を使わない井戸掘りは、なかなかよういなことではありませんし、商賣人をたのめば費用がたくさんかかります。それで、何軒かの家で共同して、一つの井戸を使う所が多かったようです。

台地上には、高い木や、茂った竹やぶなどで、まわりをかこまれている農家が、よく見受けられます。ことに、北がわや西がわの木だちや竹やぶは、よく仕立てられてあります。それは、風よけ、または火よけの役目をするもので、屋敷林といわれています。



武蔵野の農家こかまれた屋敷林

武蔵野の農家はいっぱんに、廣い屋敷をもっています。屋敷の中には、おも屋といわれて、人たちのおもに住居している家のほかに、農具などをしまっておく納屋、肥料を入れておく肥料小屋、にたきをする小屋などのできているのがふつうです。別に土藏などのある家もあります。おも屋はたいがい、かやか、わらでふかれた大きな建物で、中には五間に九間の大きさのものさえたてられています。

注一　今でも、何軒かの家で一つの井戸を使っている所があります。あなたの住んでいる土地では、どうでしょうか。それはどんなわけか、考えてごらんなさい。

注二　明治以後、細い鉄管を地中深くうちこんで水をくみあげる方法も行われるようになりました。

注三　あなたの住んでいる近くの農家の屋敷の大きさや建物の種類や大きさなどをしらべて、地図や絵図に書いてみましょう。

注四　ローム層では、冬になって空氣がかんそうするころ、こまかい砂が風にふきとばされて、空もくらくなることがあります。そんなときは、屋敷林が砂よけにもなるわけです。

注五　屋敷林でかこまれた家は、關東地方の台地ばかりでなく、寒い風のふきさらす地方では、どこでもよく見うけられることです。よく注意してごらんなさい。

(三) なぜ、関東平野に人々がたくさん住むようになったか。

以上で関東平野の台地のことをおわり、次に低地のことと、台地と低地にまたがって発達している東京のことをのべます。それらのことを考えあわせていけば、なぜ関東地方にたくさんの人々が住むようになったかということがわかると思います。また大阪平野の場合とのちがいもわかることでしょう。

関東平野の低地　関東平野でも、台地と台地の間、ことに利根川や荒川やその他の川の下流には、かなり廣い低地帶が発達しています。そのような低地や台地をきざむ谷々には、水田がひらけています。千葉縣や茨城縣などには、とくに水田が多く、米をたくさん産出します。ことに利根川下流一帶の低地には、一面の水田があって、所によっては、まわりを堤防でかこまれた土地さえ発達しています。また、江戸時代の中ごろからのちは、沼に土を埋めて埋立地とし、田をひらき、村をつくることが、さかんに行われてきました。

利根川は、わが國でも大きい川で、その川口の銚子港から船でさかのぼり、中流にあ

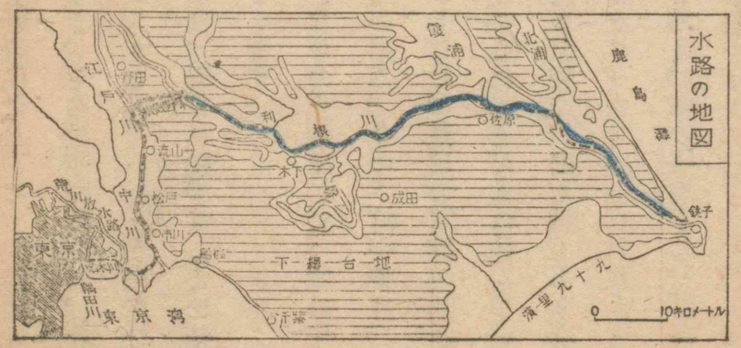
る利根運河をへて江戸川に出、それをくだって、また途中から運河づたいに東京へ出ることができます。これは、わが國では、いちばん長い陸地内の水路で、鉄道や自動車が利用される以前には、東北地方の米やその他の物をはこぶのに、大いににぎわったものです。

注一　利根運河は、長さ七キロメートルあまりで、明治二十三年にひらかれました。

注二　利根川の下流は、霞浦や北浦にも通じ、その附近一帶は、いわゆる水郷地帶として水運にめぐまれています。

注三　あなたの住んでいる土地には、船のかよう川や運河がありますか。もしあるなら、今と昔のようすをくらべてごらんなさい。

江戸の発達　今日、東京のある場所は、古くは「江戸の庄」とか「江戸の郷」とかいわれ、鎌倉時代から南北朝時



代にかけて、江戸氏という武士のかしらが住んでいました。室町時代になって、太田道灌が、今の皇居のあたり、武蔵野台地の南東のはしに城をきずき、その城下では毎日、市がひらかれていたといいます。当時は、城の近くにまで海が入りこんでいたようです。

戰國時代に入り、さらに豊臣秀吉の時になると、徳川家康は、秀吉に願ってここに領地をうつし、江戸城をきずきました。それは一五九〇年のことです。

しかし、家康がうつった当時の江戸は、まださびしい、いなかの土地でした。城のすぐ近くに、多少の農家や町家があるばかりで、南東は入江にのぞみ、今の下町一帯は、満潮の時には、水におおわれ、あしや、かやが一面に茂っていました。荒川の下流の隅田川の川口あたりの東がわには、三角州ができていましたが、ここにもまだ人は住んでいませんでした。北西の方、台地の上は、これまたぼうぼうたる原野で、田も畑もありませんでした。

しかし家康は、この地で、いつかは天下の権をにぎろうと考え、城の修理をし、町わりをととのえ、時のいたるのを待っていました。

慶長五年（一六〇〇）関が原の役の後は、家康が天下に号令をくだすようになり、江戸は政治の中心地として栄えることになりました。國々の大名が、將軍のきげんをうかがうために、江戸に集まってきます。それにつれて、商人もまたさかんに集まり住むようになり、今までの町だけでは、どうしてもせまくなりました。

そこで家康は、諸大名に命じ、多くの人々を動員して、台地の一部をきりくずし、あし原を埋めたて、三十町歩余の平地をつくらせました。これから、今の下町が発展してきました。

その後、参勤交代の制度ができるにつれて、大名の江戸屋敷もととのい、大名たちは、大阪から米その他の物産をとりよせて生活するようになりました。また、大名やその家來たちを相手に商賣をする人々が集まり、江戸は、非常にはんじょうするようになりました。

けれども、ひと所に、たくさんの家がのきをならべて立ちならび、道がせまくいりくんでいましたから、ひとたび火事がおこると、たちまち大火事になります。明暦三年

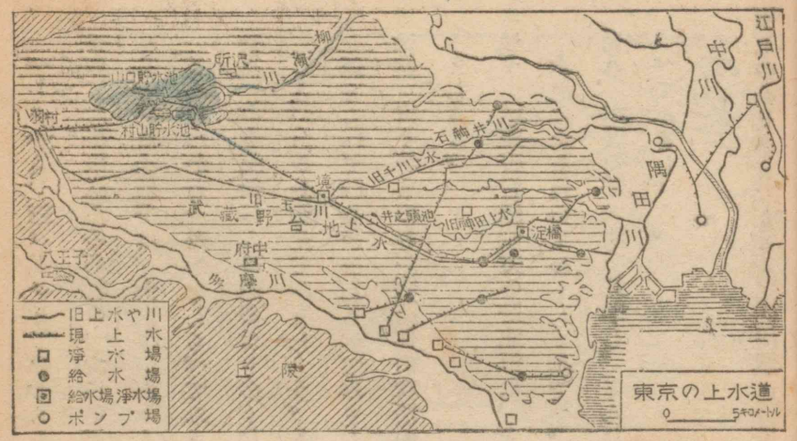
（一六五七）の大火事では、江戸の大半が焼けうせてしまいました。幕府は、これを機会に、江戸の町を整理し、土蔵造りの家や、かわらぶきの家をたてさせようと考え、また市区改正の大事業をおこしました。

さらにまた、人口がふえたため、幕府は山の手方面に旗本の屋敷町をつくり、また低地帯や、隅田川東部の三角州の排水を行って、この方面にも旗本をうつし住ませました。

その後、江戸は年とともに栄え、農村がおとろえるにつれて、町に出る者が多く、享保七年の調べでは、すでに七十一万以上の人口を有する大都市になっていました。

明治維新になって、徳川幕府がたおれ、政治の権が朝廷にもどりますと、江戸は、政治の中心地としての意味を失い、一時おとろえかけましたが、明治二年、国都がここにうつされ、その名も東京とあらためられてからは、再び活氣をとりもどし、前にもまして大発達をみるようになりました。

昔の江戸は、飲み水に不自由な土地でした。台地は、深い井戸を掘らねばなりませんし、低地は、水が出ても、にごっていてあまりよくありません。それで幕府は、なんと



かしてきれいな水をえようと考え、大きぼな工事をおこしました。そのうち有名なのは、多摩川の水を引く玉川上水や、池の水を引く神田上水などです。その後、ほりぬき井戸の技術が進歩し、江戸の町々にも井戸が見られるようになりましたが、現代では、大きぼな水道が使われています。これは大正年間に完成されたもので、多摩川の水を、武蔵野台地西方の高所の貯水池にためて引いてくるものです。

注一　家康は、なぜ江戸に目をつけたのでしょうか。「くにのあゆみ」を読んだりして考えてみましょう。

注二　家康は、小田原の町に住んでいた商人を江戸にうつしました。

注三　参勤交代のことについては、「くにのあゆみ」下の一

ページから、三ページまでをごらんなさい。

注四　火事は江戸の名物の一つにかぞえられ、こののちも、何回か大火がありました。あなたの住んでいる土地では、大火事がありましたか。もしあったら、その大火事の前後で、町のすがたがどんなにかわったかをしらべてみましょう。

注五　ある土地に人口があまり多くなると、いろいろつごうのわるいことも生じてきます。どんなことがあるか考えてみましょう。またそれを防ぐためには、どんな心がけが必要か、どんな方法がとられているかをしらべてみましょう。

注六　古くからのわが國全体の政治の中心地を図に書きしるし、どんな地勢の所にあったかを考えましょう。

注七　武蔵野台地西方の貯水池は、大きぼなもので、二か所にできていて、ふだんは、それらの貯水池に水をためておくしくみです。

注八　水道の貯水池を見学し、どんな所にあるか、その水量はどうかなどということについてしらべてみましょう。

東京のありさま　もとの江戸城には、明治以後、皇居として天皇がお住みになっていま

東京の模型図　1宮城，2丸ノ内，3新宿，4渋谷，5上野，6品川，A武蔵野台地，B山の手，C下町，D隅田川，E江戸川，F多摩川，

す。皇居の近くには、國会議事堂や中央官廳が集まって、わが國の政治の中心部になっています。皇居のてまえ、東京駅のある丸の内一帯には、銀行や会社などの大きな建物が立ちならんでいます。これらの外がわの低地帯には、銀座や日本橋など、いわゆる下町のにぎやかな商店街がひらけています。

下町を流れる隅田川の東部一帯は、工業地帯として発展しています。それは、このあたりに川やほりが多く、水による運ぱんの便がよいのと、土地が低くしめりけがあって、あまりよい住宅地ではないので、いっぱんに土地のねだんが安かったためです。

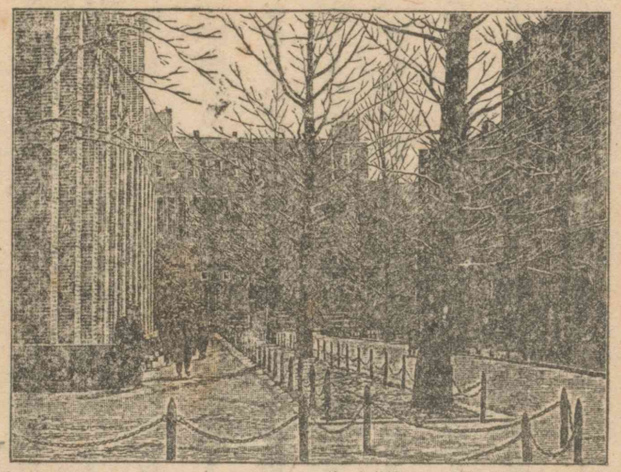
下町に対して、山の手とよばれる台地方面は、江戸時代から住宅地として発達してきたのですが、明治以後、東京で仕事をする人の数がふえるにつれ、ますますそのひろがりをまし、今ではずっと西の方にまでのびています。

戦前の東京は、人口約七百万、ニューヨークやロンドンと肩をならべる大都会でした。この大人口を相手として、全國からいろいろの品物が集まってきます。また、東京の近くでできるものは、輸送に便利ですから、関東平野には、東京を相手とする産業が発達しています。そして、これらの物や、人々をはこぶため、東京を中心にして、交通が非常な発達をしています。

東京がわが國における政治・経済・文化の中心地であることは、大きな戦災を受けた今日でも、少しもかわりがありません。國会も官廳も、新しい日本の建設のために、眞剣な活動をはじめています。いろいろな学校や、博物館・図書館なども、今までよりずっと重い使命をもつものとして、立ちなおる日が近いことと思われます。

しかし、戦爭前のととのった東京の市街を知っている人の目には、今の東京は、あま

りにもかわりはてて見えるかもしれません。ことに住宅の不足は、食糧難とともに、東京の人々にとって、もっとも深刻な問題になっています。



東京の大学

昔の街道や中央線をはじめ、何本かの電車線路にそって、ぐんぐん発達した山の手の住宅地が、一部分焼け残ったのは幸でしたが、それらの住宅地も、今では、昔の二倍の人口をいれているといわれます。はなはだしい交通難も、電車の数がへったということや、郊外の人口が急に増加したということなどが大きな原因になっています。

このような交通難が、いろいろな経済事情とあいまって、都民の食生活をおびやかしています。食糧の不足は、主食や肉・魚ばかりでなく、野菜にもおよんでいます。それを

おぎなおうとして、市街地の中心でさえ、空地に畑がつくられています。

こうした物の不足の反面に、にぎやかな商店街がはんじょうしているのは目に立ちます。戦争直後は、焼けあとに露店市が立っているだけでしたが、今では、昔にくらべれば、みすぼらしいとはいうものの、ずいぶんりっぱな商店が立ちならぶようになりました。

映画館や劇場をとりまく長い行列も、野球場の人の波も、地方からきた人たちの目をおどろかすものです。あらゆる不自由にたえて、日夜復興へと努力している人々に、心のうるおいを與える場所としての娯楽機関のはたらきは、見のがすことができません。

町には、ジープや進駐軍のバスがさかんに走っており、どこを歩いても外國の人たちにあいますが、もう、だれもふしぎに思わなくなりました。

省線も、地下鉄も、都電も、すずなりの人をのせて走っています。東京・上野・新宿の大停車場から、毎日はき出されていく人は、たいへんな数にのぼります。ほとんど大部分の通勤者が、郊外に住んでいることを考えると、都心の人々を、晝と夜とでくらべ

てみることも興味があると思います。

まだ工業が十分さかんになっていないので、町の活氣は、ほとんど商業が独占していますが、しかし、まもなく工場も働きはじめ、交通ももとのようになることでしょう。

戰争直後、人々の心がすさみ、秩序がこわされたことはたしかですが、しかしその中から、今は、新しい秩序が、力強くもりあがってこようとしています。ことに、すべての財産を失い、肉親をさえなくした人たちが、そのいた手にまけないで、心から助けあいながら復興にはげんでいるありさまは、それこそ新しい日本を生みだす尊い力のように思われます。

注　東京とその附近については、「初等科地理」上を参照しましょう。

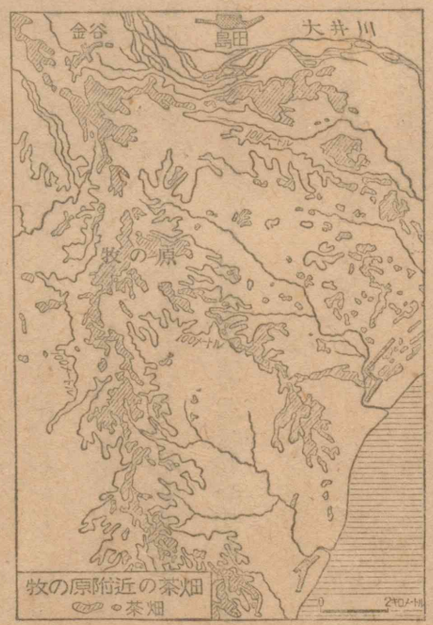
(四)　その他の台地には、どんな所があるか。

茶畑の多い牧の原　静岡縣の海岸にも、所々に台地があります。中でも有名なのは、大井川下流の南岸にひろがる牧の原です。ここは、水はけのよい高さ約五十メートルから二百五十メートルの台地ですが、その台地面の約五分の一は茶畑になっています。この茶

畑は、維新のころ、徳川家に仕えていた人々が、苦しい生活をきりひらくため、かいこんしてつくりはじめたものです。

このほか、氣候のよい靜岡縣には、いたるところに茶畑があって、きちんと刈りこんだ茶の木がならんでいます。富士山に、まだ雪がのこっている春さきの茶つみどきになると、どこの茶畑ににぎわいます。この附近各地の茶の産額は、わが國の全産額の半分以上をしめています。

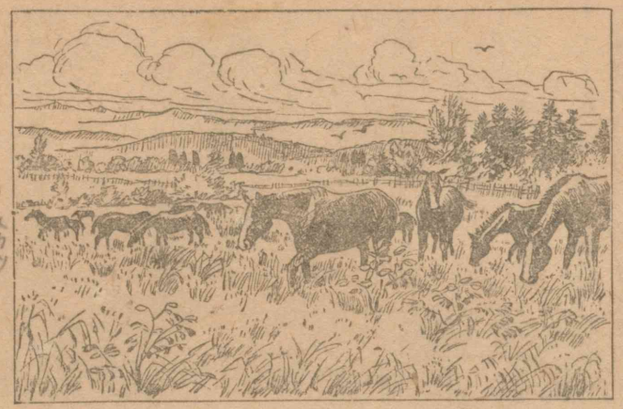
注　製茶業の中心地靜岡は、茶の取引のさかんな土地で、近くの清水は、茶の積出港です。



牧馬のさかんな青森縣の東部台地　青森縣の東部一帶も、台地のひろがる地域です。ここは、本州の北東部にあたり、海岸に近く、寒流のえいきょうを受けているので、夏でもわりあい氣温が低く、近ごろまで、農業はあまりふるいませんでした。けれども、草のはえている台地一帶は、牧場としてよくひらかれています。

ここには、馬の飼料になる麦類や、牧草を、洋式に大きぼに栽培する場所もあって、外國風のけしきが見られます。農家の人々も牧馬に從事する者が多く、馬市も各地に立って、馬の取引ににぎわいます。

注　あなたの土地に、原野をかいこんした人はありませんか。もしあったら、その人々のことをよくしらべて、劇にしてみましょう。

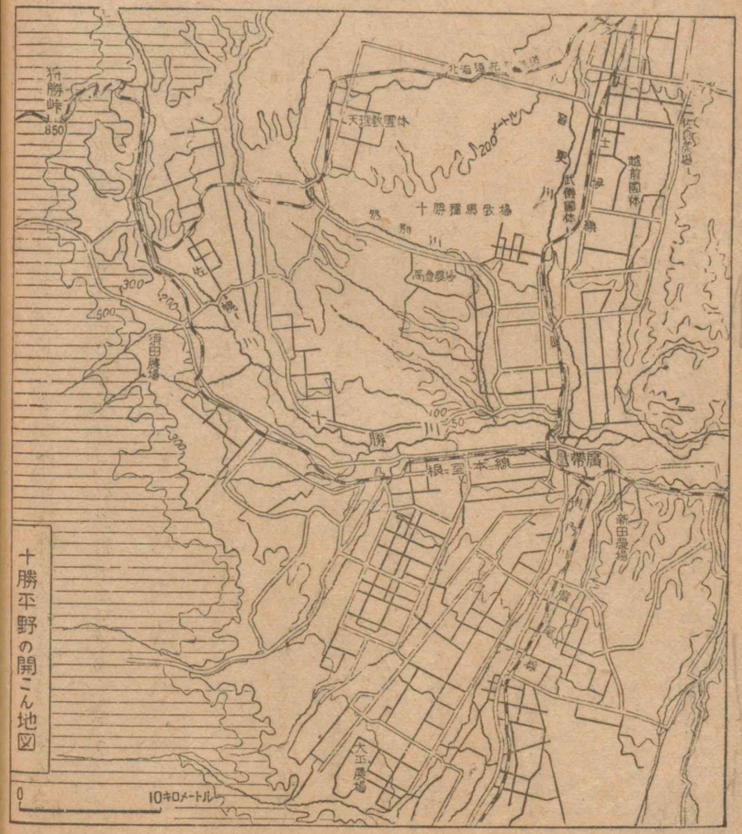


三本木の牧馬

豆とてんさいの十勝平野　北海道の南東部にある十勝平野も、台地のひろがる地方です。石狩方面からこの平野へは、狩勝峠を越えてはいります。十勝がわの傾斜面を、ゆるや

かに大きくまがりくねってくだりながら、大平原を見おろすけしきは、大陸的で雄大なものです。平野一帯は、四、五十メートルから三百メートルぐらいまでの台地で、十勝川の本流や支流がこれをきざんでいます。

十勝平野の台地は、豆類の栽培によく適し、この地方は、豆の王國ともいわれるほどです。また、てんさいも北海道第一の産額を



十勝平野の開こん地図

示します。米國の北東部や、ドイツからポーランド・ロシヤにかけて多く産するてんさいが、十勝平野にも産するのは、氣候や地味が似かよっているためでありましょう。

製糖会社は、この平野の中心の帯廣、その他にできていて、原料は、他の地方のものをも集め、収穫のおわる十一月ごろから農業のひまな時期に製造します。

注一　てんさいのことをビートともよんでいます。この栽培は、毎年つづけるとよくできなくなるので、その間は、豆類をつくります。

注二　帯廣は、明治十六年にはいった伊豆の農家十三戸によってひらかれた町で、台地面の原始林をきりひらいたかいこん当時の苦心談が、今も傳えられています。

注三　十勝平野からは、豆やてんさいのほか、氣候にあったじゃがいも・えんばく・あまなどもたくさんとれます。

注四　石狩平野と十勝平野との似ていること、ちがうことなどについて話しあいましょう。

注五　全國で、台地のひろがるこのほかの地方もしらべてみましょう。また、あなたの近くの台地について、生活との關係をしらべて発表しましょう。

四、山にかこまれている土地

川ぞいの土地や、台地のひろがっている土地のはしを、山脈がかぎっていることがあります。人々は、その山脈のむこうがわには、どんな土地があり、どんな人たちが住んでいるか、考えないではいられません。おりがあったら、その山にのぼって見てみようとか、山脈を越えてその土地にいってみようなどと思います。

ところが、山は、のぼることも、これを越えていくことも、なかなかたやすくはありません。山は傾斜が急で、しかも、木が茂ったり、急ながけがあったりします。そのような山の地方に、人のつくった道がまったくなかったときのことを考えてごらんなさい。この山にはいりこんだり、この山の地方を越えてむこうがわの土地に出るのには、いったい、どんな所を通っていくのがいちばんよいでしょうか。

天然の通路　川にそっていくのがいちばんだとは思いませんか。川は、前にのべたように、下流の方は川はばが廣く、船の通路として利用されるものもありますが、たとえ、

船が通れないような浅くてせまい上流の方でも、その両岸には、平らな土地がつづいているのがふつうです。この平らな部分こそ、天然の通路として最もよいものだとは考えませんか。

昔の人々は、この天然の通路に目をつけて、さかんにこれを利用しました。川をさかのぼっていくにつれて、両がわの平地はだんだんせばまり、人のすまいもほとんどなくなってきます。そうして両がわには、山がせまって、そのままでは進めないようになります。けれどもあたりをみまわすと、どこかに、わりあい低い所があるものです。そこで、そうした適当な所で道をかえ、川からはなれて、この低い所をのり越えれば、もう山のむこうがわです。このわりあい低い所が峠(とうげ)です。峠をくだって、むこうがわの川の上流に出、それにそっていけば、やがて別の土地に出るでしょう。

このようにして、人々は、何度も何度も同じ所をあるき、途中の通りにくい所には少し手を加えて、やがて道路の形をととのえてきたのです。山を越えていく道は、だいたい、このようにしてできています。

山地を越える鉄道も、だいたい同じ所を通っていますが、鉄道は、峠道をのぼらないで、トンネルがつくられています。

盆地　峠を越えると、むこうがわに、まわりを山でかこまれた、わりに廣い平らな土地に出ることがあります。このような、まわりを山でかこまれている土地のことを、盆地というのです。盆地には、まわりの山々から流れてくる川もあり、あるいは、その川の水が、盆地のまん中の湖に流れこんでいることもあります。

このような盆地は、川ぞい、あるいは湖ぞいで、水にめぐまれ、平地がひらけているのですから、やはり、古くから人の住みやすい土地であったでしょう。

しかも、盆地は、まわりを山々にかこまれ、出入口がかぎられているのですから、昔は要害の地として大きな意味をもっていました。つまり、戰がはじまって、外から敵がせめよせてきても、いくつかのせまい谷をふせげば、なかなかはいりこめないわけです。平和なときは、ここを自由に通って外といききすることもかんたんです。長い間都であった京都は、山城といわれる、天然の要害をなす京都盆地の中につくられたもので

す。都のおかれたこと、盆地であることは、奈良盆地も、近江盆地も、京都盆地の場合と似ています。

本州でも、いちばんはばの廣い中央部にある長野縣や山梨縣あたりは、山の地方ですが、その山々の間に、いくつかの盆地があります。中でも諏訪盆地は、小さいながらも、中にきれいな湖をたたえ、湖の岸には、町や溫泉があり、山のすがたや水の色が美しいばかりでなく、盆地と生活との関係を考える上にもまことにふさわしい所ですから、これについてくわしくしらべることにしましょう。

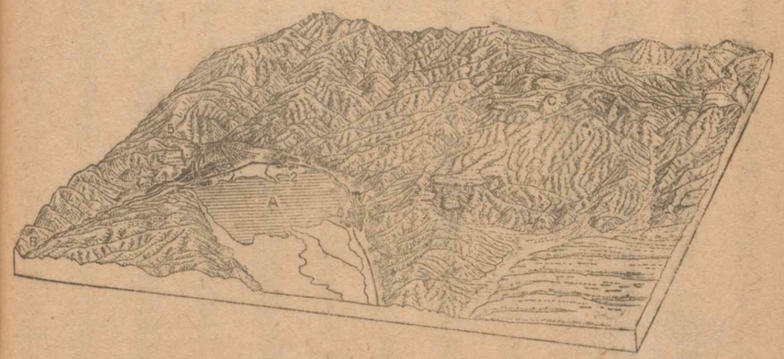
注　あなたの住んでいる地方には、盆地がありませんか。あったら、それを地図でしらべてごらんなさい。また、全國のおもな盆地をしらべてごらんなさい。

一　諏訪盆地の人々はどんなにして生活をきりひらいたか。

昔の諏訪盆地の生活　諏訪盆地は、天龍川の上流にあって、太平洋がわと日本海がわのほぼ中央にあります。面積約百五十平方キロメートルのこの小さな盆地は、海面から七百六十メートルの高さにあって、いわば、一つの高原盆地ともいうべき所です。盆地の

中には、約十六平方キロメートルの諏訪湖があります。

模型図をごらんなさい。まわりの山々から流れ出る川が、湖にそそいでいます。そうして、その湖からは天龍川が流れ出ているでしょう。この川や湖では魚をとることができます。まわりの山々には、たくさんの鳥やけだものがすんでいます。ことに、この盆地の北東部の入口である和田峠附近からは、黒耀石という、かたい黒ガラスのような石が出ます。この石でつくったやじりは、金属のなかった時代には、たいそうするどいものとしてたっとばれたのです。こうして、この盆地は、大昔石器時代の人々が住むのに、たいそうつごうのよい土地であったわけ



諏訪盆地に集まる水系と山々　A　諏訪湖，B　天龍川，C　霧が峯
1　岡谷，2　下諏訪，3　諏訪市，4　和田峠，5　塩尻峠，

です。川にそって谷をのぼってきた人々は、山また山の所に別天地のようなこじんまりしたこの盆地をみつけて心をひかれ、だんだんと集まってきたことでしょう。

道路のおもなものには、どんなものがあるでしょうか。まず、北東部からはいって北西にぬけていくもの、これは、中山道とよばれています。南東部からは、甲州街道がのびてきています。さらに、天龍川にそってくだれば、遠く東海道方面とれんらくすることもできます。

さらにまた、川や湖の岸には、こえた平地があって、農業もできます。このように、資源と交通にめぐまれているのですから、時代がくだるにつれて、だんだんたくさんの人がはいりこむようになりました。

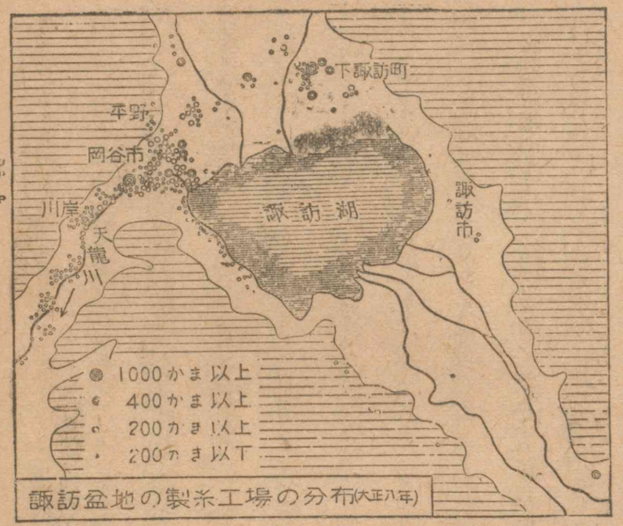
ところが盆地の中の農業に適した平地は、結局かぎられたものです。川の下流の低地ならば、自然に陸地がふえていくこともありますし、人の力で、浅い海を干拓して土地をふやすこともできます。台地ならば、水が不自由でも、その水を手に入れる方法さえ考えつけば、これまたかいこんしていくことができます。これに対して、盆地のよう

な、まわりを山々にかこまれた土地では、その山々の間の平地をふやすことはできません。たとえ湖を埋めてみたところで、知れたものです。それに、湖を埋めてしまえば、こんどは、今まで湖からえてきた利益を失ってしまうおそれがあります。まわりの山々のふもとで、たがやせるだけの所はたがやしてみても、平地とちがって、ひらけた土地が少なく、傾斜が急で、田や畑をつくるには適しません。

人口がふえるにつれて、これだけの耕地では、どうしてもくらしていけないことになります。それにこの地方は高い所にありますから、氣候の関係で、しばしば農作物がよくとれないことがありました。人々はいったい、どんなふうにして、生活の道をきりひらいてきたでしょうか。

諏訪盆地の工業　江戸時代にはいって、大陸から輸入される絹織物や生糸が少なくなり、それにかわって、わが國の養蚕業がさかんになったことは、さきにのべました。盆地の人々は、この養蚕業に目をつけたのです。そして、荒れ地にも桑をうえ、蚕を飼い、まゆから糸をとりはじめました。

まゆから糸をとるには、きれいな水と燃料が必要です。山々から流れてくる川や、湖から流れ出す水は、きれいで質がよく、燃料は、山にいけば十分あります。それにこの地方は、空氣がかわいていて、まゆの貯蔵に適していますから、ますますつごうがよかったのです。



諏訪盆地の製糸工場の分布(大正八年)

はじめは、めいめいの家で、一、二台の小さな機械をあやつって糸をとっていたのですが、やがて大じかけの工場もできてきました。すなわち、湖から流れ出す天龍川のほとりや、湖に流れこむ川々の落口に水車をかけて動力をえ、工場をたてて、大じかけに糸をとりはじめたのです。こうして、天龍川の流れ出す口の岡谷には、製糸工場がぞくぞくとして立ちならび、下諏訪や諏訪市にも工場

ができました。

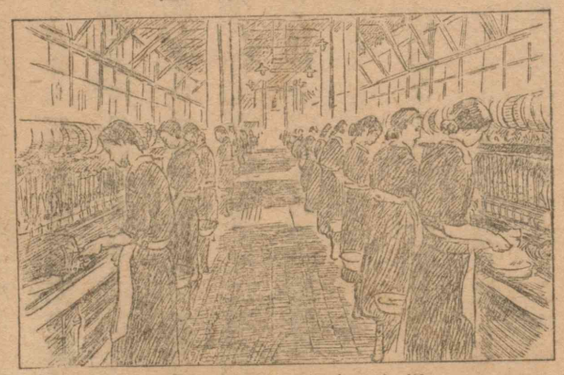
他の地方と同じように、ここでも養蚕はおもに女の人の仕事でした。工場で糸をとったりつむいだりするのも女の人です。男は、戸外の仕事をしたり、まゆを集めて工場に送ってきたり、生糸をよそに賣り出す仕事をしたりしました。

原料のまゆは、だいたい盆地の中でとれるものを使いましたが、やがて、まわりの地方のものも集めてきました。ほかに人々は、綿工業にも目をつけ、はるばる遠くの土地にまでいって、綿を仕入れてきました。綿は、元來あたたかい土地にできるものですから、寒いこの地方では育ちません。それで、明治以後になって、原料の綿が、外國から安く、大量に輸入されるようになると、國内における綿の自給自足もやんでしまい、今まで國内の綿だけをあつかっていた諏訪盆地の綿工場は、まったくふるわなくなってしまいました。

けれども、生糸は、開國以後、輸出品として非常に重要なものになりましたから、この地方の工場は、全力をあげて生糸の製造をすることになりました。製糸業がさかんに

なるにつれ、こんどは、盆地内だけの人手ではどうしても足らなくなり、附近の地方から、工場に働く女の人が、たくさんはいってくるようになりました。盆地の中心地岡谷は、世界的な大製糸業地として有名であり、まゆや生糸の取引も、きわめてかっぱつに行われます。

こうして諏訪盆地が、製糸業で栄えるようになり、それに関係する人々がふえるにつれて、盆地内の産業や、人々の生活は、また、すべてそれにえいきょうされてきたのです。農業も、工場関係の人々がほしがる野菜類や、りんご・なしなどの栽培にも向かってきました。温泉町として名のたかい諏訪市も、製糸業関係の人々でにぎわっています。



岡谷の生糸工場

注　諏訪湖の水は、冬になるとこおりますから、その間は工場を休まなければなりませんでした。また今日では、動力としては電氣、燃料として石炭などが使われるようになりましたから、工場

をたてるのにも、諏訪盆地のような所でなくてもよいことになりました。

寒天の製造　諏訪盆地の人々は、その生活をきりひらくために、製糸業のほかに、めずらしい産業を発達させました。それは寒天の製造で、この盆地の南東部の茅野を中心として行われ、わが國第一の産額をだしています。寒天は、食料にするほか、バクテリヤを育てるのになくてはならないもので、医学上にもたいせつなもので、輸出品にもなります。

寒天の製造場

寒天の製造もまた、水のきれいな、空氣のかわいた、日ざしの強い、しかも寒いこの土地に適したものです。原料は、海草のてんぐさですが、これは、伊豆や房州その他の海岸から、ほしたものを買ってきます。

そのほされたてんぐさを、川の水で洗い、川原で日光にさらし、水といっしょにうすに入れてつきます。うすでつくのには、以前はやはり水車を利用しました。次ぎには、かまに入れてにて、それを型に流しこんで、十二月から二月までのいちばん寒い時期の、しかも寒い夜にこおらせます。

諏訪盆地は、今でこそ交通に便利になったとはいえ、山の中であり、海岸からは遠いので、交通機関の発達しなかった昔、遠い地方から重い物をたくさんもちはこびすることは、なかなか困難なことでした。ところが、ほしたてんぐさや、できあがった寒天は、きわめて軽いものですから、これを海岸の地方からもってくることも、またよその地方にはこび出すことも、わりあいかんたんです。まゆや生糸、それから綿にしても同じことがいえるわけです。ただ、まゆは、この地方でとれるものであり、寒天は、この地方でなければよくできないものなのに対し、綿工業は、新しい動力が利用され、新しい燃料が使われるようになると、必ずしもこの土地でつくらなくてもよいのです。それに、外國から輸入した原綿を、こんな海岸から遠いところまではこぶよりは、もっと港

に近い、交通の便利な所で糸にする方がよいことになったのです。こんなわけで、製糸業や寒天製造業が、今もなおさかんなのに対し、綿工業はおとろえてしまいました。

注一　あなたの住んでいる地方では、どんな工業が発達し、どんなものがつくられていますか。それが、どんなわけでその土地でつくられるようになったのか、また人々は、そのためにどんなふうに自然を利用しているか、それから、その工業がおこる以前と以後では、どんなに土地の生活や産業がかわったかをしらべてごらんなさい。

注二　わが國でつくられる生糸はおもにどこへ送られ、どう利用されるでしょうか、しらべてみましょう。

(二)　京都や奈良は、どのように発達したか。

京都盆地と奈良盆地は、前にのべた諏訪盆地や、甲府盆地とちがって、山また山の高い場所の中にある盆地ではありません。大阪平野の低地から、それほど高くない山と山との間を越えて、はいりこんだところにひらけている、低くてわりあいに廣々とした盆地です。まわりの山々も、そんなに高くはありません。

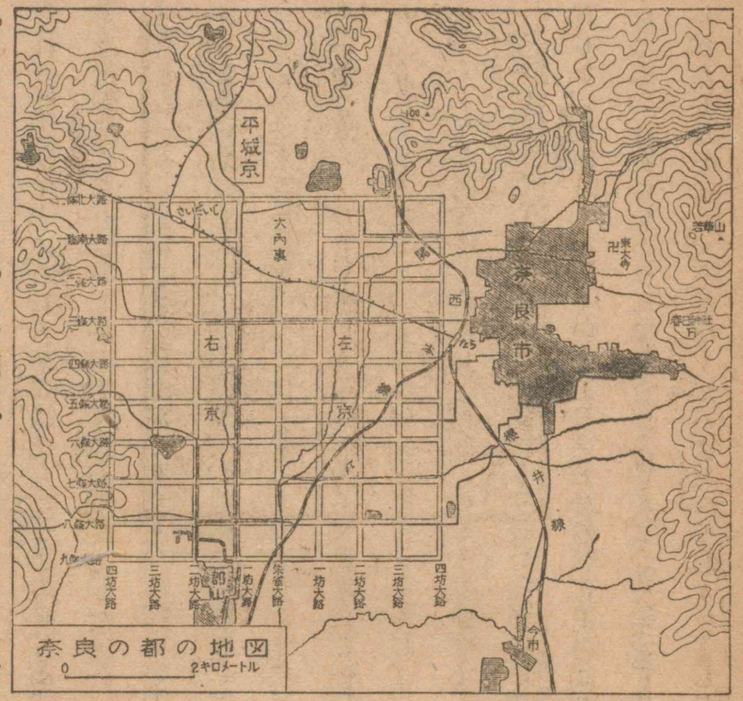
その中には、低くて平らな土地がひらけていて、各所に水田がつくられ、水田の少な

い山奥の盆地とは、かなりようすがちがいます。

もっとも、まわりの山々のふもとの、少し小高くなった所や、丘になっている場所では、やはり、その土地に應じた産業が発達しています。京都盆地の南東、宇治を中心とした附近一帶の斜面には、茶畑がつらなり、名高い宇治茶を出していますし、京都盆地の西がわの台地には、竹林が多く、たけのこが名物になっています。

京都盆地と奈良盆地の中には、前にものべたように田畑をつくるのに適した川ぞいの低地が、廣々とひらけているのですから、農業生活のはじまり出した大昔から、人々がたくさん集まってきて、となりの大阪平野とともに、早くから文化のひらけていた所です。そして今日でも、農業は、両盆地のおもな産業となっています。

奈良の発達　京都盆地も奈良盆地も、長い間都のあった土地です。そのうち、奈良盆地には、傳説として語り傳えられる古い時代から八世紀の末まで、所々に都がいとなまれました。そのいちばんさいごのものが、今の奈良市の西の方にいとなまれた平城京（奈良の都）でありました。



七代七十余年の間、奈良の都は、「さく花のにおうがごとし」といわれるほど栄えました。けれども、桓武天皇のときに、都が京都にうつされたのちのさびれかたは、とてもはなはだしいものでした。

もともと、町や都会が発達するのは、商業がさかんになって、銭が廣く使われるようになり、かつ、おたがいの間に、いろいろな職業があらはれるようになってからのことです。わが國で、そのようなようすがみえはじめるのは、だいたい平安

時代の末からで、はっきりそのような時代にはいってくるのは、戰國時代の末からです。それ以前の時代、すなわち平安時代のなかごろまでは、まだ物々交換のさかんな時代であり、職業らしいものはあっても、それは、おたがいのための職業なのではなくて、一部の人民をおさめている貴族たちの生活を豊かにするためのものにすぎなかったのです。このような時代には、政治をとっている貴族たちの集まっている場所以外には、町らしい町、都会らしい都会はまだできません。

奈良の都は、そのような時代に、町も何もない盆地の中に、大陸のふうをまねて、人工的につくりあげた都でした。ですから、都が京都にうつされ、貴族たちがうつっていってしまったあとは、だれもここをかえりみるものがなく、荒れほうだいに荒れてしまいました。けれども、奈良の都にのこっ

奈良

ていた興福寺・東大寺などの大きなお寺は、その後もたくさんの領地をもち、その領地の農作物が、みな奈良の都に集まってきます。それにお寺では、きまったときに、もよおしがあります。そのもよおしの時には、四方から人々がおまいりに集まるのですが、この人々が集まるおりに、自分のつくったものを、他の人のつくったものととりかえようとか、自分のつくったものを賣ってもうけようとか考える人たちが、品物をもちよって、市を立てるようになりました。市が、くりかえしくりかえし立つうちに、その場所に住みついて、店をつくり商賣をするものもあらわれてきました。こうして、お寺を中心に、しだいに今の奈良の町ができあがってきたのです。

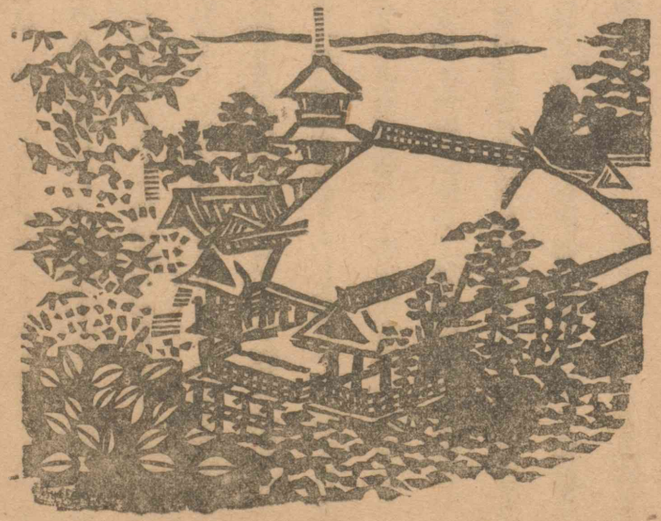
注一　奈良の都については、「くにのあゆみ」上の一〇ページをごらんなさい。

注二　奈良のお寺は、もとの都の東のはしの方にたっていました。それで、今の奈良市はもとの都からは、東の方にかたよっています。

京都の発達　京都盆地の平安京も、そのつくりはじめられたときのありさまは、奈良の都の場合と同じようなものでした。けれども、ここは、その後四百年という長い間、

政治の中心地として栄えたのですから、政治の権力が武士の手にうつって、朝廷の力がおとろえてからも、奈良の都のように、かんたんにはすたれませんでした。それに第一、朝廷の貴族たちは、この京都を決してはなれたがらなかったからです。

それに、朝廷の貴族の生活を中心に、ここにはすぐれた職人が集まり、美しい絹織物やその他の工藝品がつくられ、文化の都として、人々にしたわれました。室町時代に、十数年もつづいた應仁の乱で、平安京はずいぶんと荒らされました。しかし、天皇は、この都にとどまっておいでになり、貴族もまた、平安の都を決して忘れはしませんでした。ですから、以前の平安京のあり



京　都

さまはなくなっても、やはり、なんとか都としての形をつづけることができたのです。

戰國時代の末になると、諸國の大名の中には、都にのぼって朝廷をいただき、天下に号令して、全國を統一しようと考えるものがあらわれました。織田信長は、その一人で、しかもついに成功した人です。信長は、あたりを平定しながら都にのぼりますと、平安京を再びさかんにしようと考え、皇居を新しくつくり、四方に逃げていた貴族や商人や職人をよびもどしました。信長のあとをついだ豊臣秀吉は、さらに、長い戰乱の間にすたれ乱れていた都の整理に手をつけ、いろいろな建物の場所をうつしたり、町のまわりをととのえたり、都のまわりに土手をきずいたり、さらに新しく商工業者をつれてきたりしました。皇居は、長い間にずっと東の方にうつり、町全体も、以前の都とは少し形がちがい、東の方にずれています。しかし、秀吉の整理した新しい都の町々は、やはり以前の町すじにしたがって、ごばんの目のようにきちんと東西南北に通じ、ここに新しい京都の町の生活がはじまったのです。

秀吉のころは、もう商業がさかんになり、全國各地に、都市がさかんにあらわれていまし

た。そのような情勢に加えて、京都は、交通にも便利であり、有名なお寺もたくさんあり、それがほとんど佛教のいろいろな宗派の本山なのですから、これにおまいりにくる人々も少なくありません。したがって、時代がくだるにつれて、京都はいよいよにぎやかな都市となり、今では、日本指おりの大都会です。

奈良盆地にしても、京都盆地にしても、長い間、都のあった土地ですから、盆地の中には、いろいろと歴史上有名な場所や、たいせつな建物がのこっています。そのような史跡や名勝をたずねるために、訪れる人もたくさんあります。

注一　平安京のことについては、「くにのあゆみ」上の一五ページをごらんなさい。

注二　應仁の乱については、「くにのあゆみ」上の三三ページをごらんなさい。

注三　京都の美術工藝品にはいろいろありますが、中でも西陣織・友禪染・清水焼などが有名です。

注四　京都と奈良については、「初等科地理」上を参照しましょう。

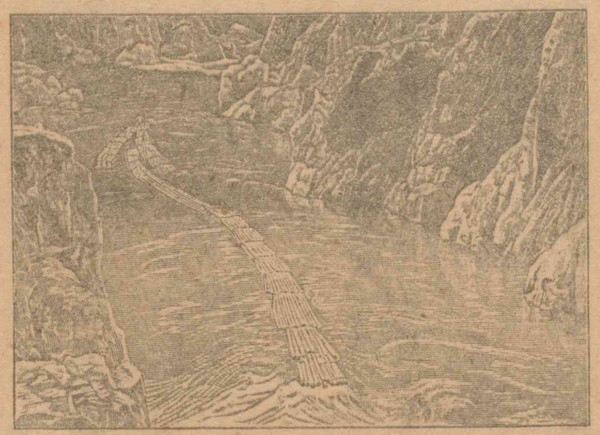
注五　あなたの住んでいる町や市が、いつごろから、どんなふうにして発達してきたものか、また町や市の中心街が、昔と今ではどうちがっているか、などをしらべてごらんなさい。

注六　京都や奈良、その他各地の名所旧跡の絵葉書や写眞をもちよって、展覽会をひらきましょう。

五、山の地方

わが國は、北海道・本州・四國・九州などの島々からなっている、弓なりの形をした列島の國です。これらの島々は、いずれも、せぼねのような山脈がまん中を通り、そのせぼねにそって火山帶があって、いっそう山を多くしています。國土の約八割は山地ですから、わが國は山の國であるといってもよいでしょう。

川々は、せぼねのような山脈をさかいにして、四方に流れています。國土のはばがせまいので、それほど長い大きな川はありません。川の上流にいくと、春から夏にかけては、青々と木の茂った谷あいを、きれいな水がいきおいよく流れています。秋には、もえるようなもみじが山をいろどります。山が高くなると、谷も深まり、両がわに絶壁のつづく所もめずらしくありません。このような深い谷あいを、峡谷とよびますが、川々の上流には、峡谷美で有名な場所も少なくありません。



丁八ろど

山地のうち、ことに火山地帯には、所々に湖や沼があって、まわりの風景をいっそう引き立てています。日光の中禪寺湖や、青森縣と秋田縣のさかいにある十和田湖などは、そのよい例です。

また、火山地帯には、いたるところに溫泉がわき出ていて、休養や保健のために利用されています。わが國は、溫泉の國でもあります。

注一　あなたの住んでいる土地の近くにある峽谷を見物にいき、写生をしてごらんなさい。

注二　峽谷美で有名な川の写眞や絵を集めて、展覽会をしましょう。

注三　わが國の溫泉の分布図をつくって、火山帶との関係をしらべてみましょう。

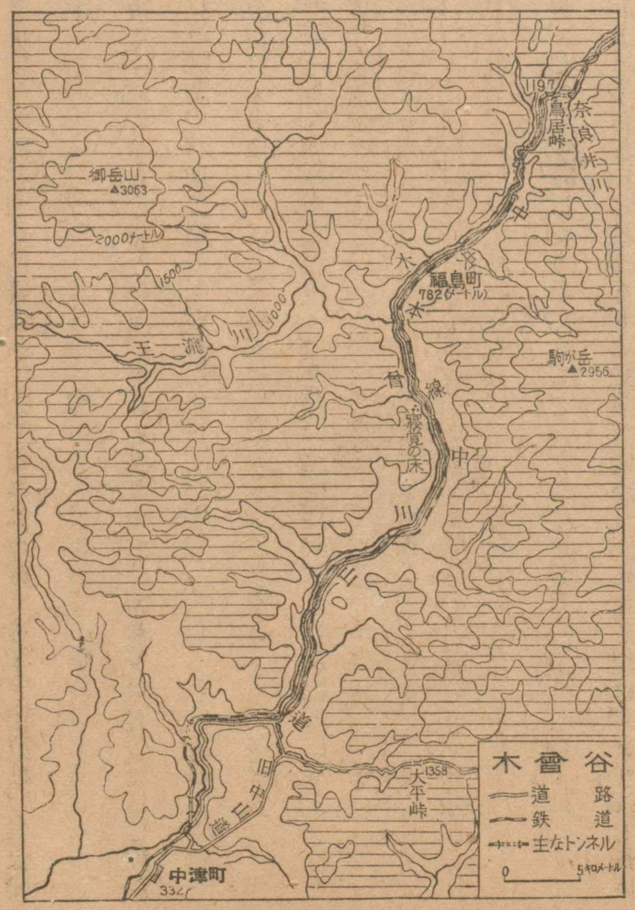
注四　あなたの住んでいる土地の近くに溫泉場があったら、その溫泉場の歴史や、そこにくる人たちはどこからくる人が多いか、季節々々では、溫泉客の数や種類にどんな変化があるかをしらべてごらんなさい。

(一)　木曾谷には、どのようにして人がはいりこんだか。

森林の木曾谷　本州の屋根ともいわれる中央部の山地から流れ出る川は、いずれも長い峽谷をつくっています。中でも、木曾谷とよばれる、木曾川の中流から上流にかけての

地方は、わが國でも代表的な谷あいの地域ですから、これを例にとって、しらべてみましょう。

木曾谷は、谷が清く、山の傾斜が急で、田はもちろん、畑にする土地もほとんどありません。したがって、人が住みついて、農業生活をするのに適した土地ではなかったわけです。それだけにまた、まわりの山々は、人によって荒らされる



ことがなく、長い間に茂りに茂った大木が、深い森林をつくっていました。

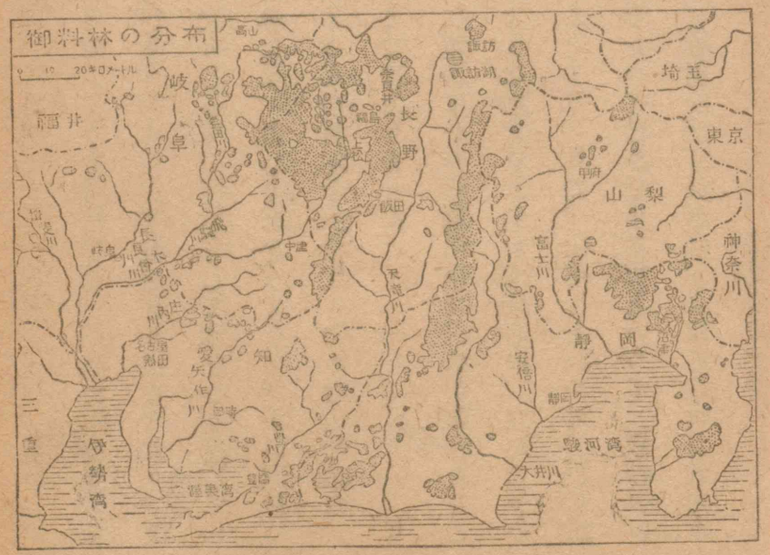
ところが、農業生活が進み、人々に余力が生じ、それにつれて分業が行われ、自分では農業をしなくても、何かほかの仕事をすれば生活をたてて行くことができるような世の中になりますと、下流の谷あいや盆地で、せまい土地をたがやしていた人々の中から、よい木やよい炭焼きの場所を求めて、しだいに、田畑の少ないこの峡谷にも、はいりこむものがあらわれてきました。

ことに、商賣が発達して、ある土地のものを他の土地に、どんどん賣り出せるような時代になりますと、もと人の住みつかなかった土地にも、しだいに部落や村があらわれるようになりました。現在、木曾谷では、木をきったり、それをはこび出したりする人だけでも三、四千人あり、ほかの土地からも人がはいってきているありさまです。

しかし、人々が、自分の利益ばかりを考えてどんどん木をきり出してしまえば、どんな大森林でも、たちまちはげ山になってしまいます。そうなれば、下流の地帯では、大水のおそれがますばかりです。そこでこの地方では、昔から、森林保護の政策がとくに

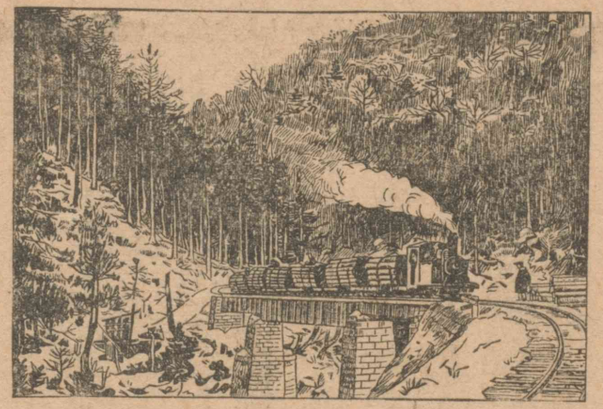
きびしくとられました。中でも、江戸時代に、このあたりのとりしまりにあたった尾張藩では、この地方によくはえているひのき・さわら・ねずこ・あすなろ・こうやまきなどのいわゆる木曾五木を、土地のものが、許しを受けないでみだりにきり出した場合は、「木一本首一つ」の刑罰をもってのぞみました。明治時代にはいって、このあたりが御料林になってからは、五木以外の木もよく保護されるようになりました。

材木のきり出しは、計画にしたがって一部分ずつ行われます。それだけでも、相当な数量にのぼるほど、木曾の地方は森林に



めぐまれています。

木がくっつきあって茂っていて、育ちが悪くなるような場所では、適当に木をきって間をひろげます。また、下枝をきりはらったり、下草をかったりします。材木として木をきり出してしまった部分には、新しく苗をうえます。よい木をつくり、たくさんの材木を生産するための山仕事は、決してらくではありません。



木曾の森林鉄道

みごとに育っている森林の中で、ほかの木をそこなわないように木をきりたおす仕事は、なかなかむずかしいことです。また、山落しといって、急な斜面で木材をおろす仕事、小谷狩（こだがり）といって、岩の多い小さな谷に木材を流す仕事は、よほどなれた人たちでないと危険なことがあります。しかし、なかまの人たちは、指導者（しどうしゃ）の号令にしたがっ

て、よく力をあわせて行動します。

これまでは、木をきるには、毎年雪が消えてから山にはいり、春から夏の間に木をきり、十月ごろまでに山落しをおわり、十一月中旬には小谷狩をすまし、さらに冬の間に木曾川をいかだにして流したものです。

せまい谷あいのいかだ流しも、なかなか骨のおれる仕事でした。まえにのっている人とうしろにのっている人で、呼吸をあわせてくだるありさまは、手にあせをにぎらせるものがありました。

しかし、木材をはこぶ方法も、時代とともに、大きな変化を見ることになりました。それは、この川にそって鉄道がしかれたり、川の途中に発電所ができたりしたためです。木曾谷では、大正七年をさいごに、川を利用する木材輸送は、まったく見られなくなってしまいました。

注一　木曾の山の中できりおとした下枝は、まきや炭につくられ、他の地方にさかんに送り出されています。

注二　ひのき、その他の木曾五木は、だいたい千五百メートル以下に分布し、それより上では、ひのきなどは葉がかれてしまいます。千五百メートル以上によく育つのは、もみ・つが・とうひなどで、二千メートル以上は、はいまつ帶となります。

注三　あなたの住んでいる土地には、森林がありますか。そこの木がどんなふうにしてきり出されるか、どんなことに使われるか、また新しい植林がどんなふうにして行われるか、しらべてごらんなさい。

注四　あなたの土地では、材木をどの地方から買ってくるのか、しらべてごらんなさい。

注五　登山するときは、高さと植物との關係に注意し、それを記錄しましょう。

注六　あなたの住んでいる土地の近くには、今でもいかだ流しをやっている川はありませんか。昔はいかだ流しが行われたが、今では行われなくなった所がありますか。もしあったら、どうして行われなくなったのか、その理由をしらべてごらんなさい。

注七　木材を斜面からおろしたり、谷から谷に渡したりするのに、しっかりした鉄さくを利用する方法が発明されたり、森林鉄道が発達したり、その森林鉄道の所まで、かんたんなトロリーにのせてはこんだりする方法が用いられるようになったので、今では、昔にくらべて、危險なことがずっと少なくなっています。

注八　炭焼きは、山奥で行われることが多く、炭焼きの人々の生活、ことに冬の生活はずいぶん不便です。その人々が、たべ物その他をどんなふうにして手に入れるか、山奥と町との間の交通や運ばんが、どんなふうに行われているか、話をきいてみましょう。

通路としての木曾谷　谷あいが、通路として使われたことは、すでにのべましたが、この木曾谷も、その例にもれず、古い時代から濃尾平野と関東平野をむすぶ山越えの道として利用されてきました。この道は、木曾路とよばれ、中山道の一部をなし、東海道とともに、わが國の道路の幹線の一つをなしていたのです。もっとも、川のふちは、所により、岩山がせまって、通り道のできにくい場所がありますので、そういう場所では、川をはなれて山の方に道路がつくられています。

しかし、谷あいの道は、平野の道とちがって、両がわに山がそびえ立つばかりです。そのような中山道を旅した昔の人は、そのせまく長い、そしてさびしい道中を、

心細いぞ、木曾路の旅は、
かさに、木の葉がまいかかる

とうたっています。

このさびしい道を通っていきますと、宿場があります。宿場は、江戸時代に、道路の制度がととのえられたとき、街道ぞいに適当な距離をへだてておかれたもので、本陣や、脇本陣といって、旅をする大名や役人たちのとまる家、問屋といっておもに荷をとりあつかう家、その他の宿屋や家々が立ちならび、ゆききする旅人ではんじょうしていました。

名古屋に出る中央線が、明治四十四年には、この木曾谷を貫通しました。中央線は、木曾川にそい、また昔の街道にそって走っていますが、街道が、所によっては山道になっているのに対して、鉄道は、たくさんのトンネルをぬけて走っています。この鉄道ができてからは、昔の宿場町には、さびれてしまうものもでてきました。それは、この地方ばかりでなく、ほかの土地でも同じことです。

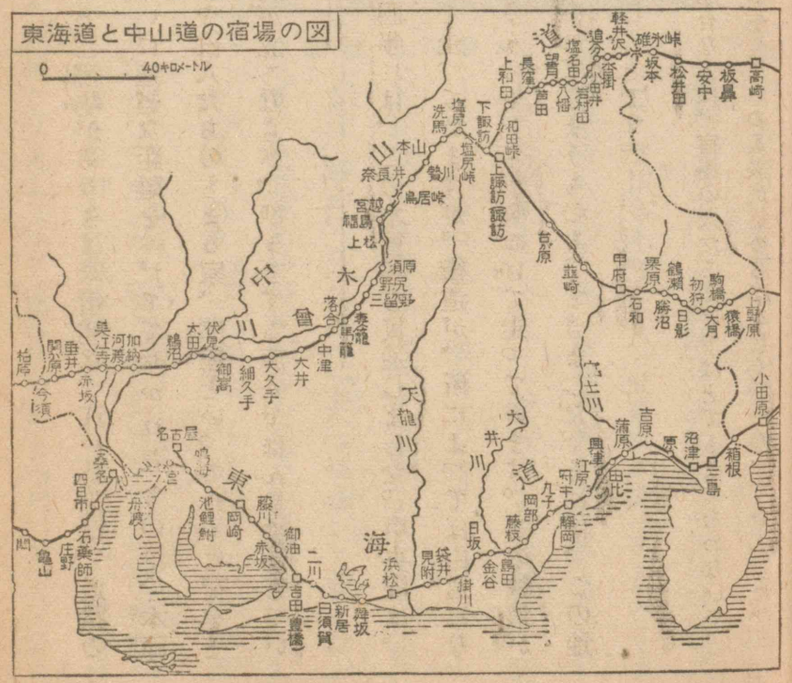
注一　参勤交代で多人数の行列が通る場合などは、宿場の人たちだけではとてもまにあわないで、助郷といわれる、まわりの村々からの手つだいの人夫が集められるしくみになっていました。

注二　宿場の人たちや、助郷の人たちは、幕府や大名のために働くわけですから、ほかの税をゆるされていました。

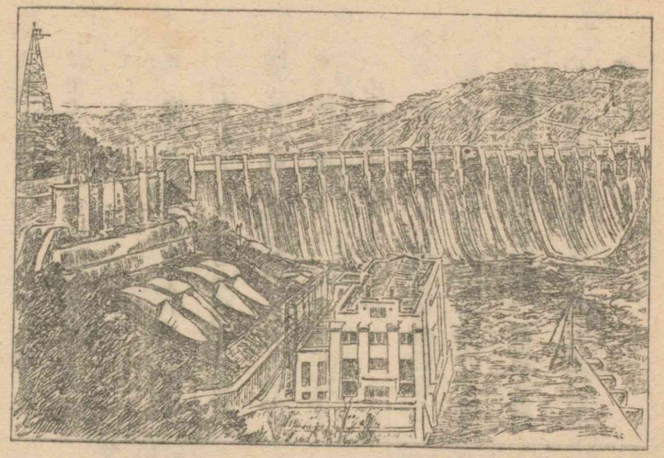
注三　東海道五十三次とか、中山道六十九次といわれるのは、その街道にある宿場の数を示したものです。中山道のうち、木曾谷には十一の宿場がありました。

注四　日本のおもな街道や鉄道をしらべたり、あなたの住んでいる地方の街道と鉄道の関係、鉄道と昔の宿場町の関係をしらべてごらんなさい。

発電地帯としての木曾谷　木曾川



は、わが國でも雨の多い地方の水を集めている上に、その流れが急であり、さらに、まわりの山々の森林が水をよく保つので、発電所をつくるのに、最も適した川です。したがって明治四十四年に、木曾谷に、さいしょの発電所ができてからは、ぞくぞくとして発電所がつくられ、現在では、その数が大小あわせて数十にもおよび、わが國第一の発電地帶になっています。



木曾谷の発電所

ただ、雨の量は、季節によってちがいがあります。すなわち、夏は、雨がたくさん降り、発電力がふえますが、冬になると、雨量が少なくなって川の水がへり、発電力もたいそうへります。それで、この発電力の低下をふせぐために、いろいろなくふうがはらわれています。たとえば、木曾川の支流である王滝川の水源地

に、大きな貯水池がもうけられたり、本流の途中に、いくつもの大きなせきをつくって、川の水をためておいたりしています。発電所用のせきができたため、前にのべたいかだ流しができなくなったのです。

木曾谷でえられる電力は、主として名古屋方面に送られ、一部は阪神方面にも送られています。このように、近くに人口の多い地方があることも、この地方を発電地帶にした理由の一つになるでしょう。

本州の中央部には、木曾川のほか、太平洋方面に流れる川では、天龍川・大井川・富士川・相模川・矢作川など、また日本海方面に流れるのでは、信濃川・阿賀川をはじめ、黒部川・神通川・庄川・手取川など、いずれも発電所の多い川として有名です。

注一　わが國に発電用として利用のできる川の多いことは、地勢の特色をものがたるものというべきでしょう。

注二　あなたの近くに、まだ発電に利用されていない川があったら、そのわけをたずねたりしましょう。

注三　発電所の多い地方には、近代的な工場がたくさんでき、そのよい例は、富山縣に見られます。

注四　わが國にさいしょの水力電氣が起されたのは、琵琶湖の水を利用した京都で、明治二十四年のことです。したがって、京都は、わが國でさいしょに電車の走った所です。また遠距離送電のはじまりは、猪苗代発電所から東京へのもので、大正三年に完成しました。

注五　あなたの近くに、水力発電所があったら、見学にいきましょう。そうして、どんな地形のところにできているか、貯水池があるか、水量の変化はどうかなどについてしらべてみましょう。

注六　電氣が発明されてから、生活がどれほど豊かになったか、労力がどれだけはぶかれるようになったかを考えてみましょう。

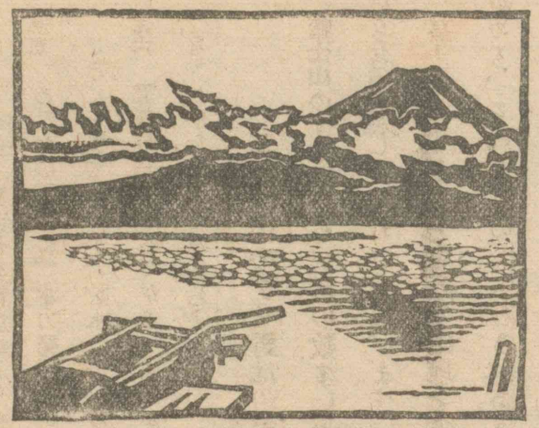
二　火山のすそ野は、どう使われているか。

富士山のすそ野　わが國の数多い火山のうちでも、東海の空高くそそり立つ富士は、昔から名山としてあおがれています。

富士山のすそ野と北方の山地との間には、富士五湖があって、そこから見た富士のながめも、それぞれのおもむきがあります。富士國立公園は、これらの地域をふくんでもうけられています。

富士山は、高さによる植物帯の変化をよく示しており、下の方に森林帯、それから淹

木帯または草原帯となり、さらにのぼれば寒帯植物も見られ、頂上に近い所は、一面の焼け野原となっています。

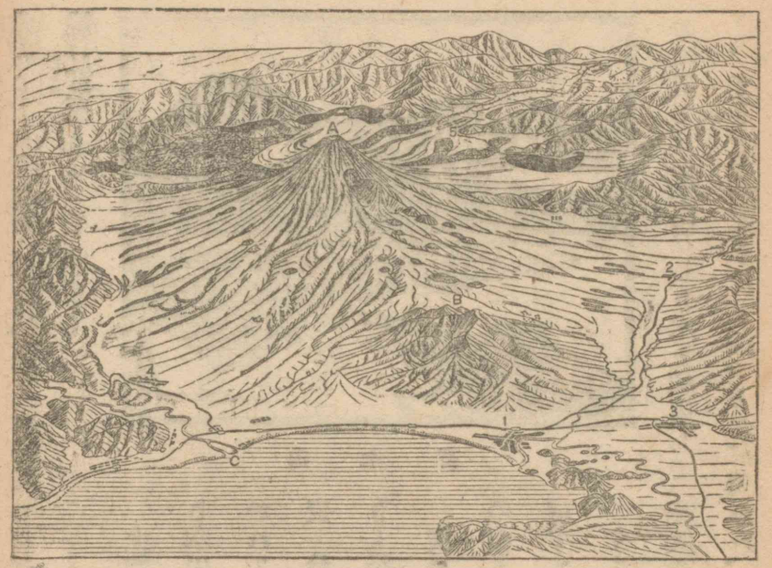


富士山

土地利用の方から見ると、すそ野の低い所でわき水の多い場所では、水車がかかり、水田もひらかれています。つづいて火山灰の所では、陸稲・麦・桑・茶などがつくられ、森林地帯では、炭焼きも行われています。

廣いすそ野の一部は、最近になって、海外からの引きあげの人たちや戰災者によって、かいこんがすすめられています。

すそ野につづく平地のうち南西部の富士宮やその附近では、豊富なわき水を利用して、和紙や洋紙の製造が行われています。和紙の原料は、すそ野に栽培されるみつまたが使われ、洋紙は、もと森林帯のもみの木を使ったも



富士山附近　A 富士山，B 愛鷹山，C 富士川，1 沼津，2 御殿場，3 三島，4 富士宮，5 吉田，

のですが、今では、他地方から木材をはこんで製造をつづけています。この地方の工場では、働く人たちが、まわりの農村からかよってくるものが多いことで、大都市の工場の場合とちがいます。

注一　富士の夏の登山は昔から有名で、五つの登山口があり、夏は、登山者でお山がにぎわいます。一時的ではあるが、山上には、郵便局・交番・宿泊所・みやげ物店などができます。

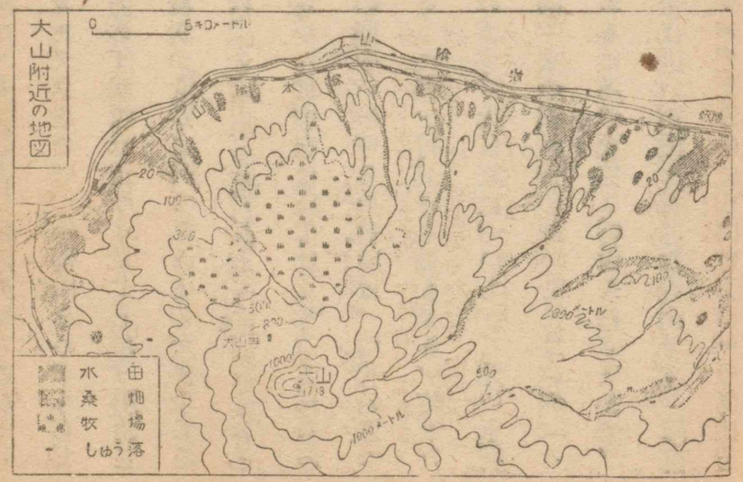
注二　頂上には氣象観測所があって、一年じゅう観測がつづけられており、つとめる人たちの苦心が思われます。

大山のすそ野　山陰地方第一の名山で

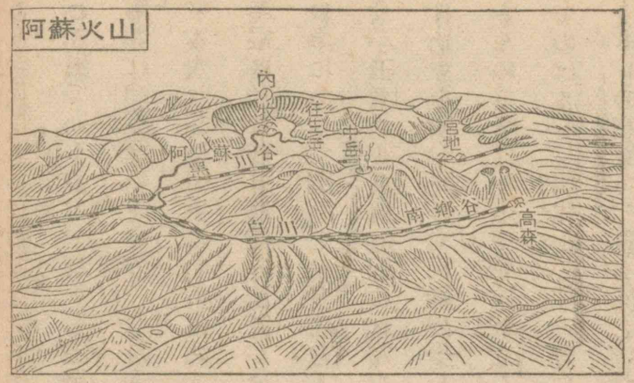
ある大山とその附近も國立公園の一つです。その山は、つりがね狀の火山で、ふもとはすそ野を長く引いています。

東方と北方との谷あいには、水田がひらかれています。畑には、さつまいも・桑がつくられ、四百メートル附近では、そばがうえられています。北方のゆるやかな斜面では、千メートル以下の草原が、牛や馬の牧場となっており、それから上には、からまつ・ぶな・ならなどの森林が茂っています。

注　大山のすそ野も、近年かいこんがさかんになっています。すべて火山のすそ野は、まだ開拓の余地があるものとして注目されています。



阿蘇山　九州にある國立公園の一つである阿蘇山は、大昔の火口附近がおちこんで、大きなくぼ地をつくっています。こんなくぼ地をカルデラといい、外輪山をめぐらしています。このカルデラは東西十八キロメートル、南北二十キロメートルもあり、世界に例のないほど大きなもので、その中央に、またいくつかの新しい火口丘ができ、その一つが、今なおさかんに煙をはいています。これらの火口丘と外輪山との間のいわゆる火口原は、南北の二つの平地に分かれ、そこに町や村がいくつもでき、約十万の人々が生活しています。火口原は、いちばん低い水利の便のある所が水田、次の森林帶のかいこん地が畑、その上部が牧場で、おもに馬の放牧に利用されています。



箱根と日光　富士に近い箱根も有名な火山です。阿蘇につぐといわれるカルデラの中には、いくつかの火口丘

があり、火口原には芦湖をたたえて、変化に富んでいます。その上、山中の所々に温泉がわき出ているので、昔から温泉地としても栄えてきました。近年は、避暑地としても利用され、設備のととのった外人むきのホテルや別荘もたくさんたてられ、遊覽や保養に來る人たちを相手にして生活する人たちも少なくありません。

箱根は、昔の東海道の旅で、いちばんの難所とされた所で、そのけわしい山道と、芦湖の岸にあった関所とは有名なものでした。昔から、小田原と三島とが登山口で、今では、小田原から東海道線にれんらくする登山電車が通じています。

日光も箱根と同じく風景が美しく、史跡にも富むので、遊覽地として栄え、町にはたくさんのみやげ物店や旅館が立ちならんでいます。町からさらに遊覽電車やケーブルカーでのぼると、男体山のすそ野にできた中禪寺湖附近に達します。このあたりは千数百メートルの高原で、夏も涼しいため、避暑地としても発達してきました。日光の奥には、温泉場もあり、一帶の地域は國立公園となっています。

注一　わが國の國立公園をしらべて話しあいましょう。また、写眞や絵葉書をもちよって見せあい

ましょう。

注二　富士山・阿蘇山・大山・箱根・日光などについては、「初等科地理」上を参照しましょう。

(三)　鉱山の話

金属の発見　何千年という長い間、石の道具をつくる方法しか知らなかった人々は、山や谷間をかけまわるうちに、とうとう、金属の存在に氣がついたのです。はじめは、谷間の流れの砂の中に、鉱石のくだけた砂がしずみ、その砂の間に、きれいな、ぴかぴか光る金のつぶをみつけたのかもしれません。あるいは、石の道具をつくろうと思って適当な石をさがしているうちに、その中にふくまれている金や銀をみつけ、時には、かなりの大きなつぶを手に入れて、珍しがり、たいせつにしていたのかもしれません。

けれども、ただ落ちているのをひろってくるだけでは満足できないのが人間です。きれいなもの、珍しいものを、もっとたくさん手に入れようとして、あれこれとくふうし、努力するのが人間です。人々の中には、きれいな金や銀を、たくさん手に入れようとして、鉱石をさがしまわり、それをくだいて、人工的に金や銀を手に入れる人も少な

くありませんでした。

しかし金や銀は、やわらかすぎて、ふだん使う道具にするわけにはいきませんし、手にはいることも少ないので、非常な宝物として貴ばれるだけでした。ところが石の中に、金や銀をみつけた人々は、金銀よりもたくさんあって、しかも、その色がちょっと金ににた金属を発見しました。それは銅です。人々は、銅をふくんでいる石をとってきて、これをくだき、水にしずめて、銅のつぶを集めるようになりました。しかし、つぶの銅だけでは、なかなかすきな道具をつくるわけにはいきません。

あるとき、何かのひょうしで、銅をかっかっともえている火の中におとした人がありました。あるいは、銅を燒いたら、どうなるだろうかと考えて、火の中にわざと入れてみた研究心のさかんな人がいたのかも知れません。いずれにせよ、人々は銅をうんと熱すると、どろどろにとけるものだということを発見したのです。そのどろどろにとけた銅を型に流しこめば、すきなかっこうの道具になるのです。ほおっておけば、やがて茶色になりますが、たえずみがけば、いつも金のような色をしているではありませんか。

人々は銅で、つぼや、はちや、なべや、かまなどをつくりはじめました。これまで食物をにたりやいたりするのには、土のなべ・かまを使っていたのですが、銅の道具を使えば、非常にかんたんに、にたきができます。ただ銅でつくった、やじりや、刀や、やりは、石よりもかんたんにはつくれますが、石よりはやわらかくて、すぐ使えなくなってしまいます。

そのころ、人々が発見していた金属の一つに、すずがありました。すずは、新しいうちは銀に似てきれいですが、やはり、やわらかな金属で、これだけを使って道具につくっても そう便利ではありませんでした。ところが、やはり研究心の強い人は、このすずと銅を、いっしょに、燒いて、とかしあったら、どうなるだろうか、ためしてみました。二つの金属を、どろどろにとかしあわせて、型にいれてひやしてみると、どんなふうになったでしょうか。色は、みどりがかっていましたが、銅よりも、すずよりもかたい金属になったのです。この金属を青銅（せいどう）といいますが、人々はこのようにして、青銅で道具をつくり、武器をこしらえるようになりました。

ふつう、人間の道具の歴史は、石器時代から、青銅器をつくって使う時代にはいったといいます。

しかし、人々は、ついに鉄を発見しました。鉄は、金・銀・銅・青銅にくらべると、どす黒くてきれいではありません。しかし、熱し方一つで、青銅よりもはるかにかたく、しかも、とげば、非常にするどいはものになります。このようにして、青銅の時代についで、鉄の時代があらわれます。今日の世界は、まだその鉄の時代のつづきだといえましょう。

わが國では、石器時代から、すぐに鉄器時代にはいったといわれています。すなわち大昔、わが國の人々が、まだ石の道具を使うことしか知らなかったころ、となりの大陸では、青銅時代をすぎて鉄の時代にはいろうとしていましたが、その青銅と鉄とのさかい目のころから大陸の文化がわが國にはいってきたので、すぐにその方法をとり入れたためと、しかも、すぐれた鉄の道具を使う方がよかったためです。

鉱山の開発　このようにして、金属の時代にはいり、金属がたくさん必要になってき

ますと、人々は、鉱石の脈をさがしてあるきだしました。はじめは、鉱石のあらわれている部分に目をつけ、上から土をのけて、その鉱脈を掘り出そうとしました。これは露天掘りといって、ずいぶん長い間行われた方法です。ところが、この方法は、鉱脈の上の土をとりのけるだけでも、なかなかの大仕事です。それに、上層にかぶさっている土が、うんと厚くなってくれば、もういけません。この下に、鉱脈があるとわかりながらも、別の場所をさがし出さなければなりませんでした。

ところが、時代がくだると、人々は、この鉱脈を直接掘りながら、だんだん土の中にもぐりこんで行く、トンネル掘りの方法を行うようになりました。少し掘って山の横あなが長くなると、太い、じょうぶな材木の柱や、ささえ木を組んで、トンネルの土くずれをふせぎ、生き埋めにならないように注意しながらやっていくのです。これならば、その鉱脈がつづく限りは、鉱石を掘り出すことができるわけです。

わが國では、室町時代にはいると、この方法があらわれるようになりました。とくに戰國の世になると、諸大名は、自分の力をふやすため、貨幣や武器の原料として、鉱産

物に目をつけ、領内の鉱脈をさがし出させました。たくさんの人々を動員して、鉱山の開発をさかんに行うようになりますと、全國各地の山々で、今まで人の住みつかなかった所にも、新しい鉱山部落が、たくさんあらわれるようになりました。

さらにまた、安土・桃山時代をへて、江戸時代にはいると、幕府は、この鉱山事業を、自分でやらなければ、各地の大名の力が強くなるだろうと考え、おもな鉱山のある土地を幕府の領地にしてしまいました。佐渡の金山、石見・但馬の銀山、甲斐の金山などは、とくに有名です。

近世のはじめ、マルコ・ポーロという人の書いた本の中に、わが國のことを、黄金の國ジパングとして書いてあることは有名な話です。この話を知った西洋の人々は、金を求めて、さかんに東洋にやって來ました。コロンブスがアメリカを発見したのも、東洋に來て金を手に入れようとしたことが原因だったといいます。ところがわが國では、近世初期の対外貿易で、あまり金を海外に出しすぎたため、國内の金が少なくなってしまったといわれています。

明治以後になって、西洋の機械文明がはいり、大じかけの機械工業が行われるようになってからは、鉄・銅その他の金属の必要は、以前に見られなかったほど、ものすごく大きなものになってきました。それにつれて、鉱山の開発はいよいよさかんに行われ、不便な山奥にも鉄道が通じ、人の住みつかなかった場所にも鉱山町があらわれるようになりました。

わが國は山が多く、いろいろな種類の鉱産物資源に富み、國全体が鉱物の標本室だといわれるくらいです。しかし、その数量は、いずれも多くありません、以前はともかくも、新しい機械文明の時代にはいった後には、どうしても國内の金属だけでは足らなくなり、鉄その他の金属を、外國から買わなければなりませんでした。このことは、今も、同じありさまです。それどころか、今後ますます必要なことになるでしょう。

注一　鉱山にいって、その分業のありさまを見学しましょう。

注二　鉱石から金属がとられ、さらに金属製品がつくられるまでには、どれほどの人手がいるか、どれほどの手数がかかるかをしらべてみましょう。

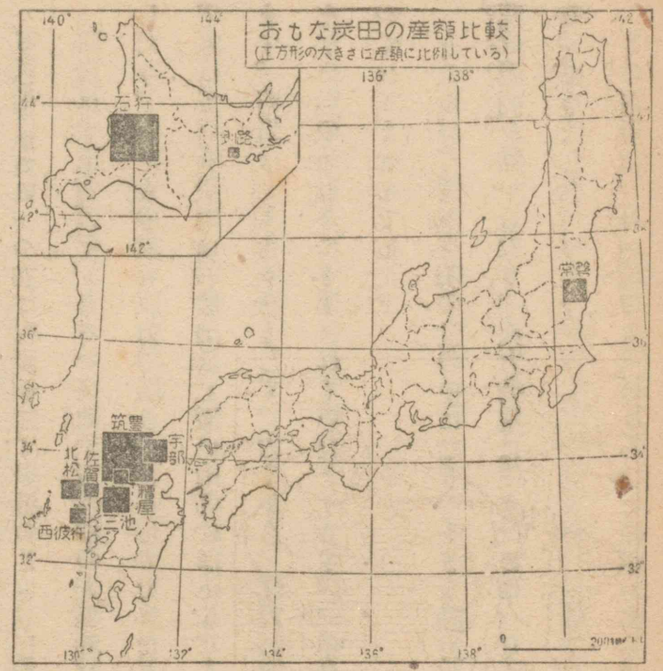
注三　西洋の新しい文明がはいり、大建築があらわれ、その材料として大きな石材が使われるようになりますと、岩山も役に立つようになり、石材のきり出しが行われるようになりました。

石炭を出す炭田　つぎに石炭を出す炭田のことをしらべてみましょう。

石炭は、数百万年、あるいは数千万年前の大森林が、地下にうずもれ、長い間に炭化したり、上からの重い圧力で固まったりしてできたものです。この、石炭のたくさんうずもれている炭田は、鉱山ほど深い山奥にはいらなくても、平地の近くの山でも見られます。石炭は、もえる石として、古くから、燃料になることが知られ、その土地では、まきや炭のかわりにも使われていたようですが、今日のように國家の重要な資源にはなっておりませんでした。

ところが、機械文明の世の中になり、大きな動力が必要になってきますと、石炭は、蒸氣機関を動かしたり、火力発電に使うために、なくてはならない、たいせつな資源になってきました。

その石炭は、わが國でも、わりあいに産額が多く、一時は、アジアの各地に輸出した



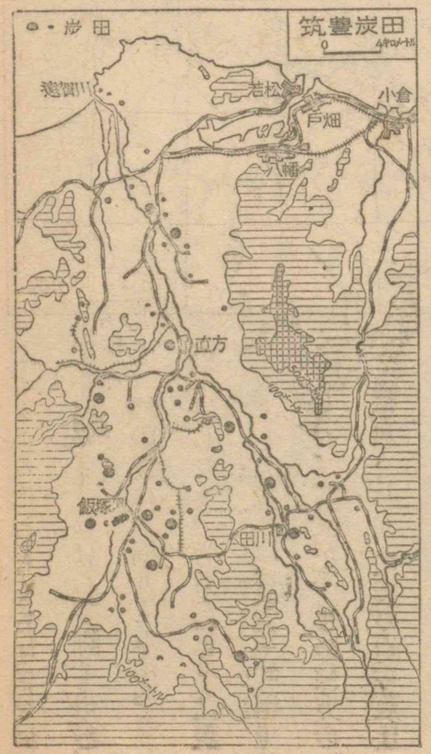
はこぶことがむづかしくなります。

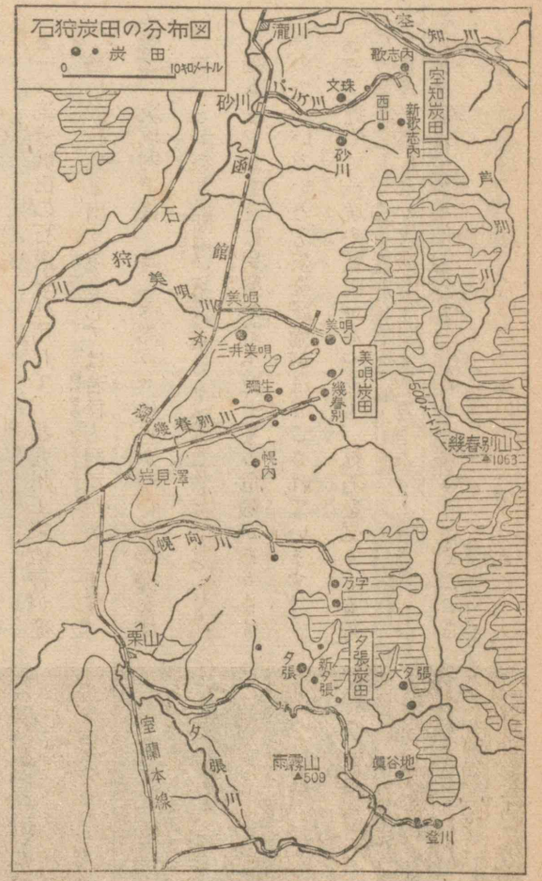
わが國で石炭をいちばん多く産出するのは、北九州の筑豊炭田や、北海道の石狩炭田こともあるほどです。しかし、戰爭中、あまりはげしく掘りとったり、終戰後は、掘りとり用の資材が不足したり、労力が足りなくなったりしたため、産額がずっとへりました。石炭が不足すれば、これを燃料としたり、動力源にしたりするいろいろな産業にさしつかえが生じます。それに、汽車の輸送もうまくいかなくなり、人間はもとより、食料その他の物資さえ

です。これについでは、三池炭田・宇部炭田・常磐炭田なども大きなものです。

筑豊炭田と石狩炭田　筑豊炭田は、地図でわかるように、筑紫山脈の間にある遠賀川の谷あいをはさんで分布する炭田です。遠賀川は、中流からさきは、二つに分かれ、ちょうどY字形になっています。それにそって、石炭をはこぶ鉄道が木の枝のようにしかれていることに氣がつくでしょう。鉄道のしかれるまでは、遠賀川と、それにれんらくする堀川とよばれる運河が水運に使われていました。

この炭田の発見されたのは、元禄年間といわれています。明治以後、欧米の工業がわが國へはいってきて、いったん石炭の價値がみとめられてからは、静かな農村も、た





ちまちにぎやかな炭鉱町とかわったのです。

これらの代表は直方や飯塚です。この地方の住民の約半数は炭坑に関係のある人々です。直接炭坑に働く十数万の人たちは、福岡縣をはじめ九州全体、および本州や四國の諸地方からも集まってきています。

石狩炭田の石炭は、夕張山脈の西がわの低い山々から掘り出されます。もとは、このへん一帯が、原始林におおわれていたのですが、明治の初年にわが國へきたアメリカ人

がこの炭鉱を発見してからは、各地に炭田がひらかれ、今日では、おもな炭坑だけでも二十あまりを数え、いずれも活氣を示しています。夕張町や美唄町などのにぎやかな炭鉱町のあること、石炭運ぶん用の鉄道網が発達していることなどは、筑豊炭田の場合と似ています。

注一　筑豊炭田の石炭を利用して、北九州工業地帯が発達し、石炭を出す港としては若松と門司があります。

注二　炭坑内では、時に天然ガスに火がついて爆発をすることがあり、断層にぶつかって水びたしになったり、掘りとったあとに岩盤が落ちたりする危険があります。ので、いろいろと安全設備がほどこされています。

注三　近くに炭坑や鉱山があったら、鉱石を掘りとる苦心や設備について見学し、お話をききましょう。

注四　炭田と似て油田があります。わが國ではどこに油田があるか、どれくらい産するかしらべてみましょう。

炭坑の内部

六、海べりの土地と沖あいの島

(一) 漁業をやっている人々は、どんなくふうをしたか。

九十九里浜のいわし漁業　関東平野の東部にある九十九里浜は、弓なりの砂浜がつづく所です。海岸にははばの廣い砂浜があり、そのうちがわのまつ林の中に、漁師の家がならんでいます。ここでは土地が廣いので、いそ浜の漁師部落とちがって、まわりもひろがっています。

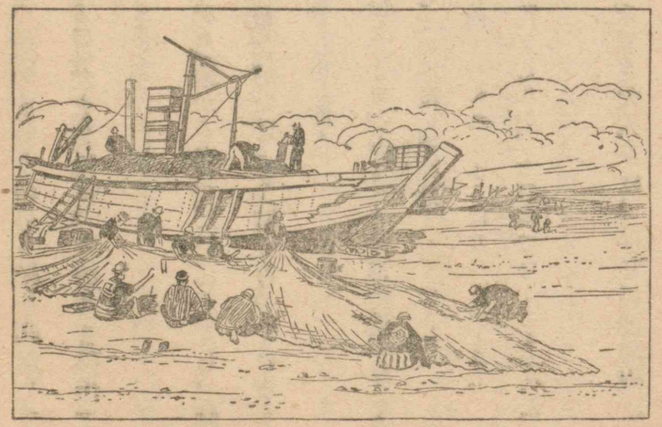
海は遠浅であり、まつ林のかげが海上に長くできたりするので、ここへは、魚類が集まりやすいとみえます。しかも沿岸には、北からつめたい流れ、南からはあたたかい流れがきて、これらがこの沖あいでまじるので、魚のえさも多いようです。こうしてこのあたりの海岸は、わが國でも有名ないわしの漁場となっています。

いわしをとるには、以前は沿岸によせてくるのを、地引網でとったものですが、これでは、岸によってくるときだけしかとれないわけです。

明治二十年ごろ、この海岸の漁業家の一人が、あぐり網という、沖あいでもいわしをとる漁法を発明しました。これは、かなり大きな船二そうで、網をしかけ、いわしをとりまいてとるやり方です。後には、十五、六トンから五十トンぐらいの発動機船も使われるようになり、沿岸からかなり遠くまでものり出してとることができ、漁獲高もたいそう増加しました。

しかし、このような大きな船を、九十九里浜のような遠浅の海岸で、海へ出したり陸へあげたりすることは、よういなことではありません。

冬の寒い時期でも、船長のさしずにしたがって、大ぜいの人々が、力をあわせて、船を海にすべり出させます。男子も、女子も、つめたい海につかって元氣よく仕事をするありさまは。



九十九里浜のあぐり船

勇ましいものです。

とったいわしは、なまのままでも賣り出しますが、家のまわりのあき地を利用して、干物にしたり、にぼしにしたりもします。たくさんとれたときには、そのまま砂浜でかわかして、ほしかにつくり、農作物のよい肥料とします。

このあたりでは、漁業のさかんな時期には、近くの農家から手つだいにくるし、農村のいそがしい時期には、漁村から手つだいにいき、おたがいによく助けあっています。このことは、魚類と農作物の交換にも見られることであります。

注一　九十九里では、船が二十トン内外のものしか使われないのは、おもにこの浜の地形によりさす。五十トンぐらいのあぐり船は、近くの銚子や勝浦などの漁港を根拠地としています。

注二　千葉縣で発明されたあぐり網漁法は、その後全國各地で行われるようになっています。

注三　あなたの土地では、農具や漁具に特別な発明が行われましたか。大発明でなくてもよいのです。かんたんなくふう改良でよいのです。

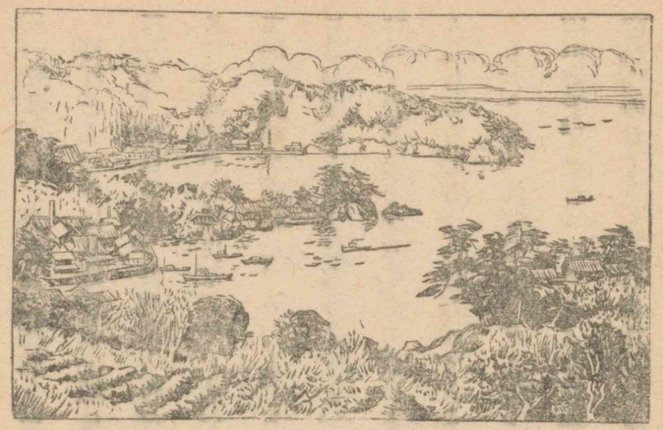
漁業の発達と漁港　大昔、大陸その他の地方からやってきた人々は、はじめは海岸につき、そのあたりで生活をしていたでしょうが、やがて、もっと住みよい場所を求めて川

をさかのぼり、中流や上流の土地にもはいっていき、石器時代の末ごろからは、すでにのべたように、各地で、農業を中心とする生活をいとなむようになったのでした。

けれども、やはり海岸の土地に、そのまま住みついていた人々もありました。この人たちも、はじめは、自分たちのたべる農作物をつくるために田畑をたがやし、そのあいまに、海岸や、川口などで、魚や、貝や、海草などをとっていたのでしょうが、ほかの土地で農業が進歩し、その人たちのつくったものと、魚や貝などの海産物をとりかえることができるようになりますと、いつか、自分たちの手で農作物をつくることには、それほど力をそそがなくてもよいことになり、もっぱら漁師の仕事にせいを出し、それでくらしを立てるようになってきました。

もっとも、海岸なら、どんなところでもよいとはいえません。波のあらい場所や、岩山が海までせまっているような場所は、海の仕事をするのには適当でなく、波の静かな海産物のたくさんとれる場所がよいわけです。人々は、海のおだやかな内海とか、湾とか、入江とか、川口とかをえらんで住みついていたのです。こうして各地に小さな漁村

ができました。



南九州の漁港

こうした漁村のうち、船つきのよい所は、しだいに人が集まって漁港として発達します。そうなると、岸ぞいの場所だけでは満足できなくなり、人々は、もっとたくさんのえものをうるために、遠く沖あいにまで出かけていくようになり、それにつれ、船のつくり方もだんだん発達して、大きな漁船もできるようになりました。

船がたくさん使われるようになりますと、こんどは、その船をつないでおく船だまりが必要になってきます。いくら静かな海岸でも、海が荒れれば、その波うちぎわや、入江も荒れ、舟がだいなしになってしまうおそれがあります。

そこで人々は、静かな海を、もっと静かに、そして、いつでも静かであるようにしようと考えて、くふうをこらしました。このことは、文化が進んで、人が岩や石を自由に使いこなせるようになり、さらにコンクリートなどが発明されるようになると、いっそう発達したのです。すなわち、湾の中や、入江の口などに、防波堤をきずき、安全な港を人工的につくりあげるようになったのです。

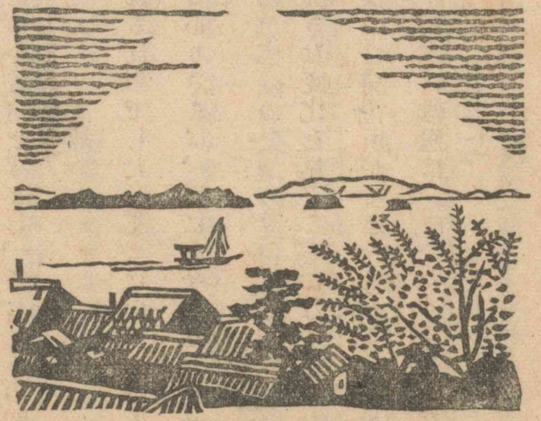
漁港が非常にさかんになれば、とれた海産物をしまっておく冷凍会社や、それを加工する工場も必要になり、さらにまた、取引のために、海陸の交通の便利なことが必要になってきます。そして、このような場所には、さらに大きな防波堤がきずかれ、大漁港があらわれるようになりました。

注一　近くの漁港にいって、自然の條件を考えたり、人工的な設備について、見たりきいたりしてみましょう。

注二　あなたの住んでいる土地では、魚をどこから仕入れてきますか。どんな種類の魚がありますか。

(二) 塩はどんな所につくられているか。

瀬戸内海の沿岸　瀬戸内海は、いわばわが國の海の公園です。岡山縣と香川縣にはさまれた地域は、とくに國立公園になっていて、島の多い瀬戸内海でも、ここは特別変化に富んでいます。花崗岩の白い山はだ、緑のまつ、青い海、これらがいりまじっている風景は世界的なものです。船で海上をいくと、岬かと思えば島、島かと思えば岬といったぐあいで、あかぬながめというのはこんな所をいうのでしょう。思わぬ島山のかげに小さな漁港があって、白かべに黒がわらの民家がかさなりあい、また島の上の方まで、きれいな果樹園ができていたりするのも、自然の美景とあいまった人工の美だと思われます。

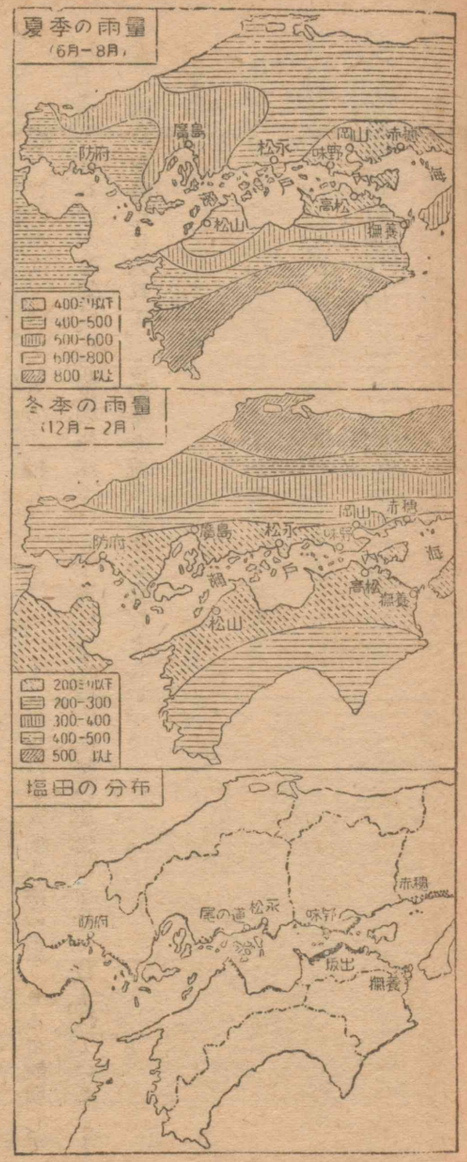


瀬戸内海の海岸

瀬戸内海の塩田　瀬戸内海の沿岸は、北海道をのぞけば、わが國で最も雨が少なく、晴

天日数の多い地方です。また、潮の干満の差がわりあい多い所で、遠浅の砂浜がつづき、かつ、その砂の質がよく、いわゆる塩田をつくるのに適しています。

ことに讃岐（香川縣）の坂出は、塩の産額の多いことで有名な所です。この地の塩田は、今から百二十年ばかり前にはじめられたもので　排水用の溝や塩水の取入口に、特別のくふうがこらされています。

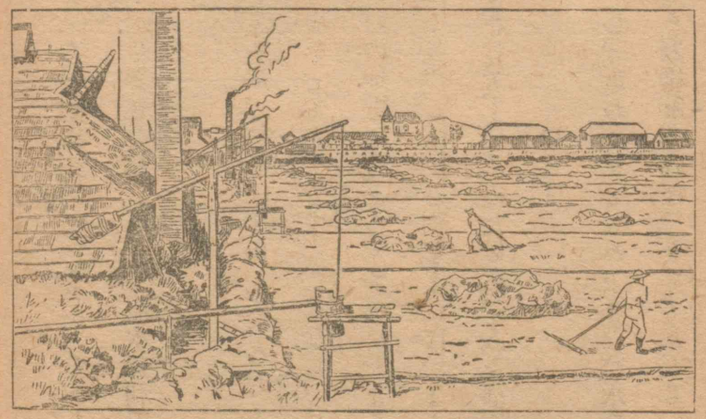


讃岐地方は、農業地としては、岡山平野とともに、全國に例を見ないほど人口密度の大きな所なので、塩田に働く人手も近くで十分まにあいます。

この地方には、塩の製造にともなって、にがりを利用した製藥業もおこり、また塩を入れるためのかますつくりも、近くの農家では、さかんになっています。

注　瀬戸内海については、「初等科地理」上を参照しましょう。

塩つくり　塩は、人間にとって、なくてはならないたいせつなものです。「さとうはなくてもよいが、塩の配給が少ないのはおお困りだ。」と、おかあさんたちがおっしゃるのをきいたことがありま



坂出の塩田

せんか。

外國では、岩塩（がんえん）といって、土の中に、塩がまるで石炭の層のように、埋まっている所もあります。しかし、わが國では、岩塩はまったく産しません。そこで、塩水を利用します。

塩水から塩をとるのには、いろいろの方法がありますが、いちばんかんたんな方法は、海からくんできた塩水を、そのままかまでにて塩をとる方法です。これなら、どんな場所でもできるわけで、昔は全國いたる所の海ぞいの地方で塩をつくっていたようです。しかし、ただの塩水よりはもっとこい塩水をつくり、これから塩をとれば、まえの方法よりは、もっとたくさんの塩がたやすくできるわけです。そのために、人々は塩田（えんでん）というものをつくって塩をとるようになりました。

それはまず砂浜の一部に塩水をかけて日にかわかし、かわいたところでまた塩水をかけるのです。この方法を何回もくりかえすうちに、その場所の砂は、とてもたくさん塩をふくんだものになります。この砂を集めて水で洗えば、その水は、とてもこい塩水に

なります。この塩水をかまに入れてにると、白い塩がとれます。塩をとるための砂地が、すなわち塩田です。

塩田をつくるには、砂浜のない場所は困ります。また、寒い土地よりはあたたかい土地、雨の多い地方よりは、雨の少ない地方がよいわけです。

それに、明治時代になると、塩は海外からたくさんに安く輸入され、また、塩が専賣制になり、そのねだんもかぎられたので、わりあい安く塩がつくれる地方、たくさん塩のとれる地方だけでしか、塩つくりは行われなくなったのです。瀬戸内海の沿岸は、明治以後、最後まで塩つくりの場所として残った地方です。

塩は、ただ食用として必要なだけではなく、工業用にもさかんに使われます。工業がさかんになるにつれて、塩の必要は、ますますましてきました。ところが、戰爭中から塩の輸入がうまくいかなくなったため、再び瀬戸内海ばかりでなく、全國のあちらこちらで塩がつくられるようになりました。しかし、それにしても、國内でつくるだけではとうていたりません。どうしても、中國や、その他、國外から輸入しなければ、工業も

私たちの食生活も、うまくいかないのです。

注一　近くに、塩をつくっている場所があったら、どんな方法で塩がつくられるのか見学しましょう。

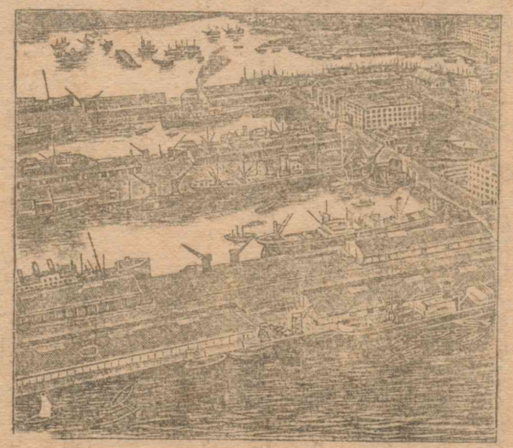
注二　分業は、一つの工場の中ばかりでなく、一つの地方、一つの國、また世界全体の生活の中でも行われています。

(三)　港は、どんなにして発達するか。

海上の交通　前に、水路は、陸上よりも、重い物をたくさんはこぶのに便利だ、ということをのべましたが、その点、海は、水路のいちばん大きなものだといえましょう。たとえば、東北地方の西がわの米を、大阪や江戸まではこぼうとする場合などは、陸をいくよりは、海をいった方がずっとらくですし、安くあがりました。ただ海上の交通、ことに汽船の発達しなかった時代の海上交通には、途中、あらしが起ったり、またのみ水や野菜などがなくなったりした場合、よって休むための港がたくさん必要です。それは、陸の街道に、宿場が必要だったのと同様です。

ところが、幕末から、西洋の文化がとりいれられ、汽船の時代にはいりますと、海上の交通は、以前よりずっと安全になり、かなり遠い所を、いっきに航海することができるようになりました。そのため、以前、沿岸航路の港として栄えた所で、おとろえたものもあります。たとえば、仙台に近く、阿武隈川の川口にある荒浜や、利根川の川口にある銚子などがそれで、ここは、商業の港としてのはたらきを失い、今ではおもに漁港として栄えているのです。これは、汽車の発達につれて、昔の宿場の中におとろえるものが出てきたのと同様です。

貿易港　しかし一方には、外國との交通がはじまり、外國貿易の港として栄えるようになった所があります。横浜や、名古屋・大阪・神戸などがそれです。そしてここには、近代的な大防波堤やその他の設備がよくととの



壁岸の港戸神

っています。中でも横浜と神戸は、世界的な大貿易港として有名です。

横浜は、江戸時代までは、さびしい漁村にすぎませんでしたが、幕末になって、外國人がさかんにわが國にやってくるようになってから、江戸の近くにあるよい港として発見され、今日のように発達しだしたのです。今では、東京の外港として、また、京浜工業地帯の一中心として、わが國でも指おりの都市になっています。

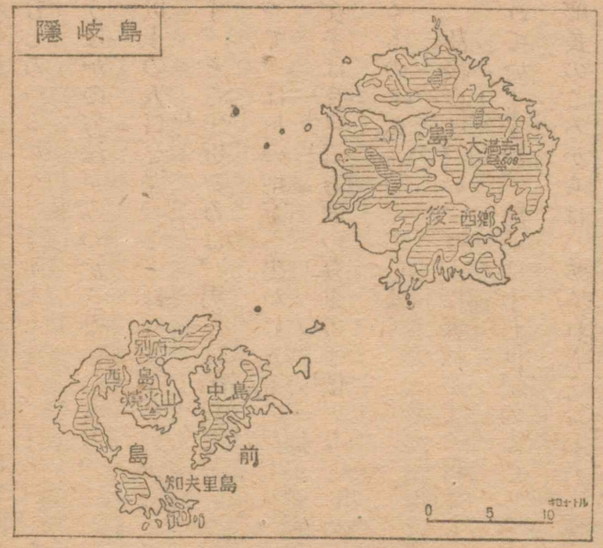
このような地方では、海陸の交通が便利で、人の大ぜい集まるのにもつごうがよいので、工業も発達します。すでにしらべられたとおり、京浜工業地帯や阪神工業地帯は、そうした有利な條件の所です。名古屋附近や北九州、あるいは瀬戸内海の沿岸各地も、同様に工業地として発達しています。

注一　このほか、港の近くに工業の発達しているところをしらべてみましょう。

注二　近くにある商業用の港について、港の設備、船車のれんらく、近くの工場の発展などについて、見たりきいたりしましょう。

(四)　沖あいの島の人たちは、どんな生活をしているか。

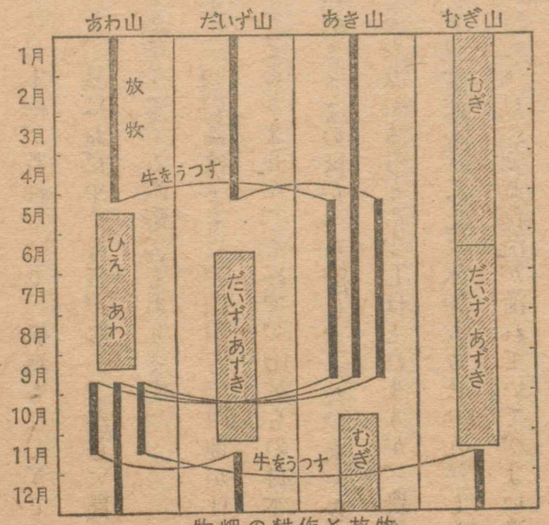
隠岐島　山陰地方の海上はるかの沖あいにある隠岐島は、島前と島後の二つからなり、いずれも火山に関係した島です。鳥取縣の境港から約七時間でいくことができます。冬は日本海が荒れるので、航海もなんぎですが、夏はおだやかな日が多く、美しい島へとやってくる遊覧客もあります。



二つの島はともに、山がちで平地がほとんどありません。それで、山からの材木や炭・まきのほか牛を産し、また、米・麦・さつまいもなども少しはとれますが、農産物は不足し、ことに米がたりません。しかし近海は、対馬海流が流れていて、よい漁場となり、漁業で生活するものも少なくありません。とくに、いかの漁獲が多く、するめの製造もさかんです。

ただ島全体としては、現在の三万余の人口以上に増加するゆとりはなく、最近では、むしろへるかたむきがあります。それは、島としていっぱいの人口となれば、それを養うほかの方法がみつからないかぎり、それ以上の人口を保つことはむずかしいからです。そこで近ごろは、男子は船員などになって、ほかの地方へ出かけるものがあり、女子は夜見浜方面の養蚕の手傳いなどにいくものもふえてきています。

島後には、いっぱんに森林がよく育てられていますが、島前は十七世紀のはじめ、慶長のころからはじめられたといわれる原始的な牧畑が、今も行われています。牧畑は山地の斜面を利用した特殊な土地の使い方で、耕地をふつう四つに区切って、四年をひとまわりとして、麦・だいず・あずき・あ



牧畑の耕作と放牧

わ・ひえなどを順番にうえながら、おのおのの場所に、それらの作物をつくらない期間、牛や馬を放牧する仕組になっています。それによって、やせた耕地も自然に肥料をえることができるのです。

牧畑中には、各人のもつ大小の土地がありますが、放牧する権利は、土地の大小によらないで平等になっており、牧畑に牛や馬を移すときなど、みんなが共同で仕事をします。牛や馬には目じるしなどをつけて、持主を区別しています。

島の生活　わが國には、小さな島がたくさんあります。ことに瀬戸内海や、九州の北西部から西部にかけては、小島が無数といってよいほどあり、昔から人が住んでいたようです。また火山帶が海中にのびたところには、火山島があります。たとえば、富士火山帶に属する伊豆諸島や、霧島火山帶に属する薩南諸島の小島などが、そのよい例です。

これらの島は面積がせまく、耕地が少ないため、人々がそんなにたくさん住みつくわけにはいきませんでした。大昔、これらの島に流れついた人の中には、ここに住みつく人もあるにはあったでしょうが、それよりは、もっと廣い大きな陸地をさがして、また

ここをはなれたものの方が多かったと思われます。まして本州その他の廣い陸地から、こんなはなれ島にまで、わざわざ住むためにやってくる人はなかったことでしょう。

ところが、島には、思いがけない資源がかくされていることがあります。以前には、その資源のあり場所を知らず、また知っていてもこれを利用する方法を知らなかったために、ほっておかれました。文化が進み、資源開発の熱がたかまってきますと、こうした島々にも、わざわざ出かけていって、その資源を手に入れようとする人が出てき、そのような人によって、島が活氣づき、たとえ農産物はよくみのらなくても、たくさんの人々が住みつくようになることがあります。たとえば佐渡の金山がそれで、佐渡は金山開発のため、室町時代ごろから、わりあい、にぎわうようになりました。

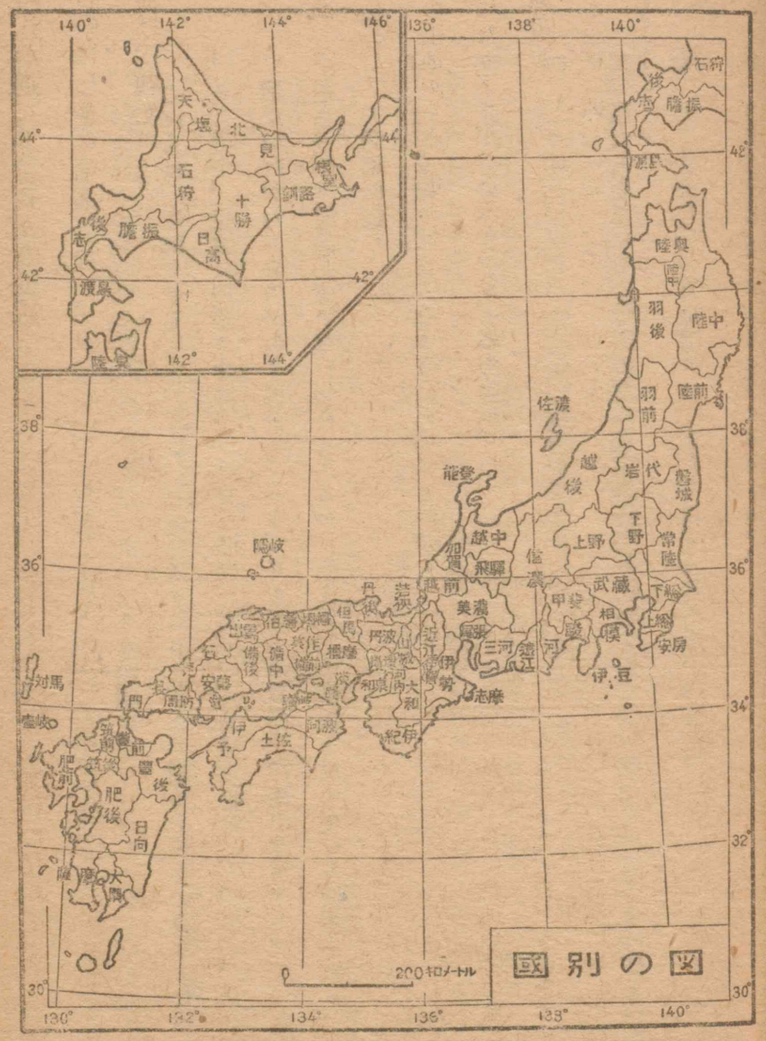
さらにまた、漁業が発達して、本土から遠い沖あいにまで舟が出るようになりますと、沖にある島は、そのような漁船の中休み所、あらしにあった場合などの避難所として利用されるようになります。そして、舟に米や野菜やその他のものを賣ってくれる家が必要になってきます。こうして島の港がにぎやかになります。

時代が進んで、人々の生活がゆたかになり、本土との交通が便利になりますと、島の美しいけしきを見物したり、めずらしい生活の研究に出かけるものがでてきます。そして島は、観光の場所としてもにぎわうようになります。

注一　あなたの住んでいる土地には、観光のために、よそから人が集まってきますか、季節にすれば、いつごろが多いでしょうか、そのような人のためにどんな設備がありますか。

注二　本土との交通が不便な島では、昔ながらのしきたりや風俗が、ほとんどそのままのこっていることが多くあります。同じことは、都会といなかの場合についてもいえます。都会には、方々の土地から人が集まり、おたがいに他の地方のものをとりいれ、どんどん新しい生活をするようになりますが、いなかでは、他の土地の人がはいってくることが少なく、その土地独特の風俗や習慣が、そのままのこされることが多いのです。新しいものを求めるあまり、古いものをすてるのは、悲しいことですが、古いものをだいじにするあまり、新しいものをむやみにおしのけようとするのもよくないことです。

注三　あなたの住んでいる土地やその近くの土地に、めずらしい習慣や古いしきたりがのこってはいないか、しらべてごらんなさい。



(附)

教師および父兄の方へ

一、第六学年の児童の生活には、例えば、次のような問題が横たわっていると考えられる。これらは、教師や父兄にとっては、児童に対するさまざまの期待や注文の根本になっているもので、児童に理解させ解決させたい問題であり、また児童自身にとっては、日々の生活にいれかわり立ちかわり現われてくる、さまざまの意図や疑問の源泉であって、自分ではっきり意識していない場合もあるが、絶えずその解決を求めている問題である。

問題の例

(一) 仕事を通じてどんなふうに協力するか。

(二) 社会を発展させるものは何か。

(三) どうすれば私たちは安全な生活ができるか。

(四) 私たちと私たちの子孫のために天然資源を保存するには、私たちはどうすればよいか。

(五) じょうずな物の買い方には、私たちはどんな知識が必要か。

(六) 工場生産はどこにどのように発達するか。

(七) 時間の余裕をつくるには、私たちはどんなふうに文明の施設を使えばよいか。

(八) 世界中の人々が仲よくするには、私たちはどうすればよいか。

児童の種々な経験は、このような問題を中心として、豊かになり、深くなって行く。

二、この本は、このような問題を児童に氣づかせ、その解決を助けようとつとめている。この本は、児童たちに、社会科学習の手がかりとなる若干の資料を與え、合わせてその学習のしかたを暗示している。その資料は、第六学年の児童に、せひ與えなくてはならない知識を精選して排列したものではない。それは範囲からいっても深さからいっても偏している。だから從來の教科書と同じように考えてはいけない。むしろ、児童用の参考書の一種として取り扱っていただきたい。したがって、この本に書いてあることを、順々に説明したり、暗記させたりしては困る。またこの教科書だけでは十分ではない。その意味で、この本を第五学年の児童が参考にしたり、第五学年の本を第六学年の児童が借りてきて参考にすることも、よいことである。

三、児童はこの本を読んで、さまざまの疑問を持ったり、計画を立てたりするであろう。教師や父兄は、この児童の興味をうまく利用して、前にかかげたような実際生活における諸

問題の解決に向け、人間生活・社会生活の理解を深め、自分たちの生活を向上させようとする心持を強め、これに対して十分な機会を與えるように取り計らっていただきたい。

四、各所に入れた注は、児童自身のいだいた疑問や計画とともに、教師の計画した学習活動に児童を導入するきっかけとして、利用することもできる。そのためには、教師は必要に應じて、この本の適当な部分を指示して、研究させたり、その読後感を求めたりすることがよいと思はれる。

五、この本は、いろいろの地勢をとりあげて、そこにおける人間生活のありさまを説明しているが、教師は、児童の住んでいる土地に、各種の地勢の要素が多分に含まれていることを考えに入れて、この本を読ませていただきたい。

小学校社会科　私たちの生活（三）
土地と人間　第六学年用
Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 8, 1949)
小社 600

昭和二十二年八月二十五日　翻刻発行
昭和二十四年十一月二十日　修正印刷
昭和二十四年十一月二十四日　修正発行
〔昭和二十四年十一月二十四日　文部省検査済〕

定価　金十五円三十銭

著作権者　文部省

発行兼印刷者　東京都北区稲付町一丁目二一三番地　二葉図書株式会社　代表者　大野治輔
印刷所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉印刷株式会社
発行所　東京都北区稲付町一丁目二一三番地　二葉図書株式会社

貴